偉大な戦勝史

偉大な戦勝史

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ112（2023）

百戦百勝の鋼鉄の総帥である偉大な領袖金日成同志

目　次

まえがき……………………………… 2

開戦後わずか3日ぶりに ………………… 5

世界海戦史に特筆すべき戦果……………… 15

プロペラ機とジェット機の対決 …………… 24

「スミス先遣隊」の壊滅 ………………… 36

現代包囲戦のモデル―大田解放作戦………… 43

燃える島……………………………… 57

清川江畔での大包囲せん滅戦……………… 65

犬死したウォーカー……………………… 74

「寸土をも敵の手に渡すな！」 …………… 82

完敗に終わった「模範戦闘」 ……………… 113

会談での大きな勝利……………………… 121

むすび………………………………… 136

まえがき

日本帝国主義の軍事的占領に終止符を打ち、解放を迎えて5年足らずの朝鮮人民と創建されて2年しか経っていない朝鮮人民軍にとって、祖国解放戦争(朝鮮戦争　1950・6・25〜1953・7・27）は実に困難な戦争だった。

米国は、朝鮮戦争に自国の陸軍の3分の1と空軍の5分の1、太平洋艦隊の大半と地中海艦隊の一部、そして15の追随国の軍隊と南朝鮮かいらい軍及び旧日本の残存勢力を含む、およそ200余万の大兵力を動員し、当時としては最も近代化された最新型の武力装備を投入した。

数的にも軍事技術的にもはるかに優勢な敵との戦争において、朝鮮人民と人民軍は偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席の指導の下に祖国の自由と独立を立派に守り抜いた。

その秘訣は何だろう。

ポルトガルの元大統領・元帥であったフランシスコ・ダコスタ・ゴメス（朝鮮戦争時期、ポルトガル軍参謀長）は次の

ように語っている。

「当時、米国が立てた作戦計画たるものは、米国の側に立った西側諸国の参謀長、軍事専門家である数十人の将軍が何回も集まって討議した末につくり上げたものである。ところが、金日成主席はそれを単独で撃破した。私はこれを目の当たりにし、金日成主席こそはこの世に一人しかいない天才的な軍事戦略家であり、偉大な総帥であることを知り尽くされた」

米国の図書『戦争とアメリカ』には次のように記述されている。

「第2次世界大戦中にヨーロッパとアジア、太平洋と大西洋の広大な戦線で戦争を指揮していた五星将軍たちが、朝鮮半島の狭い地域での戦争に同時に参戦し、額を集めて苦心したことは、米国の歴史にたった一度しかない特異なことだった。米国はこの他にも、第2類の将軍の中でも名を馳せていたウォーカー、リッジウェー、バンフリート、クラーク、テイラーのような野戦指揮官を次々と朝鮮戦争の現地司令官に任命して前線作戦の指揮に当たらせた。

歴史的にみると、米国はこうした名高い将軍を1〜2人派遣して戦争の勝利を獲得することに慣れてきた。

しかし、朝鮮戦争は米国の将軍たちを葬る墓だった。この戦争で1人の大統領と2人の戦区総司令官、1人の前線司令官が敗戦の責任を負って失脚・罷免され、1人の前線司令官が死に、1人の大統領と1人の戦区総司令官、1人の前線司令官が敗戦将軍として歴史に記された。

相手にした北朝鮮軍の総帥金日成が30代の若い将軍だということを考えると、これは甚だしく残念で恥ずべき大アメリカの悲劇だと言わざるをえない」

これらの資料が雄弁に示しているように、朝鮮人民の奇跡的な勝利は全的に金日成主席の卓越した指導によってもたらされたものである。

金日成主席は祖国解放戦争の厳しい日々、朝鮮労働党中央委員会委員長、朝鮮民主主義人民共和国内閣首相、朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会委員長、朝鮮人民軍最高司令官として、折り重なる難関と試練を切り抜けて、党・国家・軍隊と人民を輝かしい勝利へと導いた。

本書は、金日成主席が独創的な軍事思想と戦略戦術、卓越した用兵術を駆使し、世人を驚嘆させる戦勝神話を生み出した歴史的事実を紹介している。

開戦後わずか3日ぶりに

1950年6月25日未明4時、米国と李承晩かいらい一味は、ついに朝鮮民主主義人民共和国に対する戦争を引き起こした。

1945年9月、「解放者」の仮面をつけて南朝鮮を軍事的に占領したアメリカ帝国主義は、共和国北半部を侵略するための戦争を綿密に準備してきた。

米国は南朝鮮にかいらい政府とかいらい軍をつくり上げるとともに、かいらい軍を米国製武力装備で武装させ、かいらい軍に対する米軍の統帥権を確立した。

これとともに、朝鮮戦争を引き起こすための口実を設け、人民軍の戦闘力を探り、かいらい軍の実戦能力を向上させるために、共和国北半部に対する武力挑発行為を段階別に拡大してきた。

1947年1月1日から戦争挑発直前の1950年6月24日まで、米国がかいらい軍と武装した悪党どもを共和国北半部に侵入させて強行した武力挑発件数は5150余回に達した。

これについて日本の論評家藤島宇内は、1957年7月、「朝鮮での米国の戦争挑発策動は、朝鮮戦争勃発とも呼ばれる1950

年6月25日に突発的に始まったのではなく、第2次世界大戦が終わった直後の1947年から始まった」と評した。

このように朝鮮戦争は、米国の世界制覇戦略を実現するための侵略的対外政策の必然の産物だった。

戦争挑発に関する報告を受けた金日成主席は、即時、敵の侵攻に対処するための作戦会議を招集した。

会議には民族保衛省(当時)の責任幹部や作戦幹部が参加した。

主席は、迅速に主力部隊を前線に進出させて反攻撃集団を編制し、敵に強い打撃を加えなければならないとし、反攻撃戦略を実現するための諸課題を明示した。

主席は現段階におけるわれわれの戦略的方針は、即時反攻撃戦に移って、米国が朝鮮戦線に自分らの大兵力を投入する前に迅速な機動と連続的な攻撃をもって敵を撃滅・掃討し、釜山、馬山、木浦、麗水、南海界線まで進出して祖国の領土を完全に解放し、人民軍部隊を全朝鮮に機動的に配置して、米軍の増援部隊が上陸できないようにすることだと述べた。

この反攻撃戦略は、彼我の力関係を正確に分析した戦略であり、敵の一挙一動を鋭く注視し、彼らの致命的な弱点を科学的に見抜いた賢明な戦略だった。

当時、米国が本土から大兵力を引き入れるには少なくとも1カ

月以上の時間がかかり、日本にある米第8軍の4個師団の兵力を朝鮮戦線に投入しようとしても一定の時間を要した。これは、米国が朝鮮戦争を準備する際に予期できなかったことである。

さらに米国は、その兵力が帝国主義軍隊の脆弱性と極度の傲慢さ、政治的・道徳的低劣さを持つ雇い兵だという弱点は見ることができなかった。

敵のこうした弱点と、敵軍に比べた政治的・思想的及び戦略・戦術的優越性に基づき、朝鮮人民軍は戦争初期、前線に素早く力を集中して強い攻撃力を用意することができ、米軍が兵力を増強する前に敵の基本集団を撃滅・掃討し、反攻撃の目的を実現することができた。

金日成主席は、反攻撃戦略を実現する上で提起される具体的な問題も明らかにした。

主席は、われわれの戦略的方針を三つの作戦をもって実現しようとする、第1次作戦では敵の不意の侵攻を挫折させ、反攻撃に移って3日後にソウルを解放し、その後2日間に水原まで進出し、第2次作戦では8～10日間に大田まで進出しなければならない、第3次作戦では大邱を解放し、南海岸界線まで進出して迅速に海岸防御に移り、遅くとも7月末まではわが祖国の領土を完全に解放し、米軍の大兵力が上陸できないように

すべきだ、と述べた。

　主席は続けて、この戦略的方針を成功裏に実現するための威力ある方途は連続攻撃作戦であると言った。

　主席は、高い機動力と連続的攻撃をもって敵を完全な守勢に追い込んで収拾するゆとりがないようにし、敵に新しい防御線を構築し、兵力を再編制できる時間的余裕を与えてはならないと言った。

　また、現行作戦を行いながら次の作戦を先を見通して準備すると同時に、多梯隊を編制して連続的に敵の抵抗を撃破する問題、退却する敵を猛烈に追撃する上で堅持すべき問題、朝鮮の山岳地形条件に合わせて兵員と機材の機動性を正しく保障する問題をはじめ、連続攻撃作戦で提起される方途についても具体的に示した。

　主席は、戦略的方針を成功裏に実現するためには、また、敵を駆逐するばかりでなく徹底的に包囲せん滅すべきだと言った。

　そして、敵を包囲せん滅せずにただ駆逐ばかりしては、生き残った敵が山岳や河川を利用して再び反抗に出る恐れがある、こうなると、高い機動力と連続的攻撃をもって短時日内に南朝鮮を解放するという戦略的方針を貫徹することはできない、一切の作戦と戦闘において都市と地域の占領に汲々と

せず、敵の完全な包囲せん滅に優先的な注意を払わなければならないと強調した。

　主席は、敵を包囲せん滅するには迂回戦を巧みに展開すべきだとし、迂回戦は敵の両翼と後方を遠回りする戦法であり、敵の退路を遮断し、敵の両翼と背後を打撃して敵を混乱させ、敵の抵抗力を低下させるための基本的方途であると言った。

　主席は、戦略的方針を成功裏に実現するには、また、軍種・兵種間の協同行動の手配と指揮を巧みに行い、給養活動と兵器の保障、兵員の補充も円滑に行うべきだと詳細に教えた。

　朝鮮人民軍は主席の命令に従い、全前線にわたって即時的かつ決定的な反攻撃へ移った。

即時的な反攻撃へ移った朝鮮人民軍戦闘員たち

38度線を越えて1～2キロも侵攻していた敵の攻撃隊形はあっけなく乱れ、3日間に戦争を締めくくると豪語していた敵は、朝鮮人民軍の強力な攻撃に度肝を抜かれて敗走しはじめた。

人民軍連合部隊は、6個の歩兵師団と2個の警備旅団を第1梯隊に、3個の歩兵師団と第9戦車旅団、第83オートバイ連隊を第2梯隊にする2個梯隊の作戦隊形を編制して作戦任務を遂行していた。

人民軍が敵の不意の侵攻を断固と阻止し、わずか90分後に全戦線にわたって決定的な反攻撃に転じたのは、敵にとってそれこそ青天の霹靂のようなことだった。

特に、朝鮮人民軍の大連合部隊が主攻撃方向を敵の「主力」が総集結しているソウルに定め、果敢な進撃を開始したのは驚くべき出来事だった。

1950年6月25日、金日成主席は民族保衛省の幹部に、反攻撃戦略の主攻撃方向をソウルに定めながら、われわれの戦略的方針を実現する上でキーポイントは38度線界線とソウル一帯に配置された敵を一撃の下に掃滅することであると言った。

主席は驚きを隠しきれない幹部たちに、敵の基本集団は38度線界線と漢江以北の議政府、ソウル一帯に集中しており、漢江以南の地域には少ない兵力しかない、こうした条件の下

でわれわれが短時間に38度線界線とソウル一帯で敵の基本集団を包囲せん滅すれば、敵背の戦略的地域へと迅速に成果を拡大することができる、と確信に満ちて語った。

主席が示した三つの攻撃方向に沿って、人民軍の攻撃隊形はまるで敵の胸板を突き刺す鋭い三つ穂槍のように、もっぱらソウルの敵陣に向けて進撃した。

こうして、前線全体の13％に当たる42キロの主攻撃方向に歩兵の26％、砲兵の37％、戦車の80％、飛行機の100％が投入された。

人民軍の強力な反攻撃に出くわした敵は完全な崩壊の危機に瀕した。

米国の高位層は急変する事態に唖然とした。米国の出版物もこれについて「開戦初日の最大の悲劇は、米軍事顧問団長のウィリアム・ロバート准将が『アジアで最強の規模』だと断言した韓国軍の崩壊だった。……もはや自身を防御することすらできなくなった」と慨嘆し、「戦場の騒音におじけづいて暴れ回る牛馬のように逃げ去る姿も見えた。韓国軍の兵士は民間人に銃を突きつけて奪った衣服に着替え、難民の中に紛れ込んでしまった」と暴露した。

人民軍の主力部隊はソウルに向けて破竹の勢いで攻撃し、6

ソウルへ進撃する朝鮮人民軍部隊

解放なったソウル市民の歓迎を受ける朝鮮人民軍戦車兵

月27日の夕方にはソウルが目に入る所まで進出した。

ソウルへの総攻撃命令を待っていた人民軍連合部隊は、思いがけなく総攻撃を一時中止するという命令を受けた。

その命令は、大激戦でソウル市民の生命財産と民族文化財宝に被害がないようにという金日成主席の決断によるものだった。

こうして、時間を争っていたソウル解放作戦は翌日の6月28日の朝に延期されるようになった。

6月28日5時！

人民軍の総攻撃が開始され、人民軍勇士たちは敵の抵抗をことごとく粉砕してソウル市を解放する戦闘を繰り広げた。

ついにかいらい中央庁に共和国旗が掲げられ、6月28日の11時30分、ソウル市は完全に解放された。

朝鮮人民軍総参謀長の姜健が金日成主席に、ソウル市を解放したということを報告した。

主攻撃方向の前線連合部隊は反攻撃に移った3日後に敵の牙城であるソウルを解放したのである。

これは政治的・軍事的に大きな勝利だった。

英雄的な朝鮮人民軍はソウル解放作戦の成果に基づき、その後１カ月足らずの間に南朝鮮領土の92%、人口の90%以上

を解放した。

当時の人民軍の戦果をみると、反攻撃の開始後3日間におよそ6万の敵兵を殺傷または捕虜にし、4万3000余挺の狙撃兵器を鹵獲し、1400台の自動車、142門の各種の砲、その他飛行機、艦船をはじめとする数多くの戦闘技術機材を敵の戦力から除去し、軍旗を鹵獲した。

敵もこれについて「全体の半分以上がソウル陥落前の3日間に戦死したり、負傷または捕虜になった」と慨嘆し、「陸軍本部は9万8000余人であった兵籍簿でわずか2万2000人しか確認できなかった」として悲鳴を上げた。

人民軍のこうした戦果は、敵に比べて兵力や戦闘技術機材が優れていたからではなかった。

敵も認めているように、南朝鮮かいらい軍の兵力数は10万だったが、開戦4日後にはその4分の3が行方不明となり、敵の基本集団は単に敗北しただけでなく崩壊した。

この勝利は、金日成主席が示した独創的な反攻撃戦略思想と、主攻撃方向をソウルにするという大胆な軍事作戦の勝利であると同時に、大部隊戦と小部隊戦を組み合わせた主体的な軍事戦法の輝かしい勝利でもあった。

世界海戦史に特筆すべき戦果

1950年7月初め、朝鮮戦争に焦点を合わせていた世界のマスメディアは、朝鮮東海上の注文津沖で行われた海戦に関する記事や軍事論評家の文を大見出しで大々的に報じた。

「朝鮮人民軍の海軍、魚雷艇で米海軍の重巡洋艦を撃沈！」

「魚雷艇で重巡洋艦を撃沈、これは単なる戦果ではなく奇跡である」

「朝鮮人民軍海軍の4隻の魚雷艇は米第7艦隊所属の重巡洋艦『ボルチモア』号を撃沈し、1隻の軽巡洋艦を撃破した。これは、雄牛とツチバチとの戦いで巨体の雄牛がツチバチの針に刺されて完全に倒れたのと同様である。これこそ世界海戦史上初めての奇跡中の奇跡である」

この報に接した世界の人々は驚きを禁じえなかった。

金日成主席が、朝鮮東海岸に侵入した米海軍の重巡洋艦を含む艦船集団が南へ進撃する人民軍の地上部隊と平和な都市や村に無差別の艦砲射撃を強行しているという報告を受けたの

は、ソウルが解放された翌日の1950年6月29日の夕方だった。

しばらく考えにふけっていた主席は副官に、元山にいる海軍司令官を明日まで内閣に到着させるようにと指示した。

翌日、執務室で海軍司令官に会った主席は、わが国の東海に侵入した米第7艦隊所属の機動分艦隊は、艦砲射撃で道路や橋梁をはじめ重要施設と家屋を野蛮に破壊し、東海岸沿線に沿って進撃する人民軍連合部隊の行く手を遮ろうとしている、と語った。

そして、東海岸沿線に沿って進撃する人民軍連合部隊の攻撃速度を保障できなければ、内陸地帯で攻撃する主力部隊の戦闘行動に大きな支障を来たすようになるとし、その場で海軍司令官に米軍の艦船集団を掃滅する戦闘命令を下した。

海軍司令官は、主席の厳かな言葉に驚いた。

彼は米第7艦隊所属の機動分艦隊が東海岸に侵入して戦闘行動に移ったということを知って対応策を立てていたが、断固と立ち向かって海上戦を行おうとはせず、機雷を敷設したり海岸砲をもって防御することばかり考えていたからである。

それもそのはず、海へ出す戦闘艦船もなく、攻撃兵力としてはただ魚雷艇5隻が全部である第2魚雷艇隊があるのみだった。

それも1隻は故障して修理中なので、実際に戦闘に投入できる魚雷艇は4隻しかなかった。

敵の艦船集団は1万7300トン級の重巡洋艦1隻、1万4000トン級の軽巡洋艦1隻、3500トン級の駆逐艦1隻からなっていた。

乗船兵員は3500余人であり、武力装備は203ミリ大口径砲をはじめとする各種口径の砲170余門に複数の魚雷発射装置を備えていた。

敵が一名「海上に浮かぶ島」と呼んでいた「ボルチモア」号にしても、長さ205メートル、重さ1万7300トン、兵力数1700人、各種艦砲69門に飛行機まで搭載していた。

反面、魚雷艇は長さ21メートル、重量17トンで、武力装備は魚雷2発、12.7ミリ高射機関銃1挺、戦闘人員7人が全部だった。

兵員の数や船の排水量、武力装備において到底比べものにならない対決だった。

主席は海軍司令官に、わが海軍の力で敵の大型艦船を撃破できる方案はあるのかと尋ねた。

海軍兵力を総動員しても力に余るという彼の答えを聞いた主席は、敵の大型艦船集団を撃破するにはどれほどの兵力が要るのかと再び尋ねた。

海軍司令官は、数十隻の魚雷艇が飛行隊の支援を受けながら合同攻撃を加えてこそ可能だと答えた。主席は、世界海戦史や艦船の武力装備にのみこだわっている彼に、今わが国には魚雷艇がそれほど多くなく、また海軍に飛行機を動員する状況でもない、しかし、われわれは敵が朝鮮東海で意のままに振る舞い、野獣じみた砲撃を強行しているのをこれ以上座視することができないと、決然と言った。

そして、敵の艦船集団が夜間には墨湖沖に停泊している、第2魚雷艇隊を墨湖から50マイル離れた東草港までひそかに移動させるべきだ、魚雷艇隊が出航して不意に敵の艦船集団と遭遇する恐れがあるが、その場合には艇隊長が迅速かつ正確な状況の判断と大胆な決心をもって敵の艦船集団の攻撃に有利な出発位置を占めて攻撃するようにすべきだ、と強調した。

主席はまた、魚雷艇をもって重巡洋艦のような大きな艦船を攻撃するには近距離戦をすべきだ、重巡洋艦は舷高が高いから、魚雷艇が近くまで接近すると艦砲射撃ができない、と言った。

当時、朝鮮人民軍海兵の思想・精神状態は非常に良好だった。

日本帝国主義植民地時代に奴隷の悲惨な生活も体験し、解

放後、人民政権の下で人間としての真の生活も思う存分享受したのだから、みなが祖国を守るために命をかけて戦う決意に満ちていた。

1950年7月2日0時、第2魚雷艇隊は東草港を発った。

彼らが北上して注文津沖に至った時、ふと東の水平線上に黒い煙が上るかと思うと、一つ二つと船体が見え始め、敵の艦船が次々と現れた。

「敵の艦船を発見！」、金君玉(第2魚雷艇隊長、22歳)は艇隊に戦闘警報を下した。

次第に姿を現した敵の艦船集団を注意深く見ると、前には軽巡洋艦、中間には重巡洋艦、最後には駆逐艦が配置されていた。

金日成主席が教えたパルチザン式の海上襲撃戦法で戦えば必ず勝利するという必勝の信念に満ちて、魚雷艇は前進を続けた。

金君玉は敵の大型艦船3隻のうち一番大きな艦船をターゲットに選定した。それは重巡洋艦だった。

「艇隊は魚雷攻撃、敵の重巡洋艦に向けて全速で進め！」

この突撃の号令に従って4隻の魚雷艇が船首を上げて白い水しぶきを立てながら重巡洋艦「ボルチモア」号へ突入した。

魚雷艇が数隻しかないと気をゆるめていた敵は慌てふためき、ようやく我に返って大小口径の艦砲で猛射撃を始めた。

その時、第24号艇が敵の砲弾に撃たれて止まり、残りの3隻の魚雷艇は集中射撃区間を突破し、敵艦の1000メートル近くにまで接近した。

真っ先に突進した第23号艇と敵の重巡洋艦との距離は800メートルとなった。

「発射！」

第23号艇から発射された魚雷が敵の重巡洋艦に当たり、すさまじい爆音が響いた。

続いて第21号艇が敵の重巡洋艦から550メートル離れたところまで近づいて魚雷を発射した。

けたたましい爆音と共に大きな水柱が立ち上った。

第21号艇は再び突撃針路に入ったが、発射管の故障で魚雷を発射できず、敵の重巡洋艦と駆逐艦の間を抜け出た。

すると、敵の駆逐艦が第21号艇の後を追って機動を始めた。

この時、第21号艇は追撃する駆逐艦に向かって煙幕を張った。

駆逐艦は第21号艇が自分らを攻撃する準備をしていると思

い、あたふたと逃げ始めた。

この隙に乗じて第22号艇は370メートルの距離まで近づいて、「ボルチモア」号の中間部に向けて魚雷を発射して命中させた。

3発の魚雷に命中された重巡洋艦からはすぐ大きな火炎が立ち上り、しばらくして巨大な怪物は徐々に沈没しはじめた。

戦闘開始4時間後の1950年7月2日9時10分、マストに星条旗を掲げて太平洋と大西洋を勝手に横行し、主人顔をしていた「ボルチモア」号は朝鮮東海に侵入して悲惨にもその存在を終えた。

朝鮮東海に侵入した米軍の重巡洋艦「ボルチモア」号

第22号艇は2回目の魚雷攻撃のためにすばやく離脱機動して、行く手を遮る軽巡洋艦に一発の魚雷を命中させた。

結局、この日の戦いでは朝鮮人民軍海軍が勝利した。言い換えれば、米陸軍に先立って朝鮮東海に侵入し、傲慢に振る舞っていた艦船集団を4隻の小さい魚雷艇をもって撃破し、米国の侵略者に朝鮮人の気概を示したのである。

魚雷艇隊は主席の命令を貫徹した勝利者の意気高く帰路についた。

世界の海戦史に特記すべき奇跡とも言える注文津海戦での勝利はこのようにしてもたらされた。

この日、注文津海戦について報告を受けた金日成主席は、第2魚雷艇隊の海兵たちは今回の戦闘で非常に大胆に行動し、戦術を巧みに活用した、4隻の魚雷艇をもって敵の重巡洋艦を撃沈し、軽巡洋艦を撃破した第2魚雷艇隊の海兵たちの勇敢無比な戦闘偉勲は、朝鮮の海軍史だけでなく世界海戦史にも誇り高く記録されて永遠に輝くだろう、と語った。

そして、注文津海戦で偉勲を立てた第2魚雷艇隊の海兵に自分の戦闘的な挨拶を伝えるようにと語った。

主席は7月８日にも、祖国の歴史にとわに輝く不滅の偉勲を立てた第2魚雷艇隊の海兵に栄誉の国家表彰を授与すべき

だとし、魚雷艇を巧みに指揮して注文津海戦の勝利に決定的な寄与をした第2魚雷艇隊の艇隊長と、2発の魚雷を全部命中させて敵の重巡洋艦を撃沈させるのに大いに寄与した第22号魚雷艇の艇長に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与すべきだと語った。

こうして、艇隊長と艇長は朝鮮の初の共和国英雄称号を受け、第2魚雷艇隊には後日、近衛称号が授与された。

プロペラ機とジェット機の対決

人民軍の連合部隊が敵の牙城に向かって怒涛のごとく進撃している時、人民軍空軍の飛行士たちも祖国の領空を守って勇敢に戦った。

朝鮮人民軍飛行隊は事実上、速度や装備において近代的技術を誇る敵機に比べようもないプロペラ式航空機だけであり、朝鮮人民軍の飛行士は空中戦の経験が全くなかった。

しかし、彼らは祖国の空を守って躊躇することなく敵機に立ち向かって勇敢に戦った。

金日成主席は、祖国解放戦争が開始された初日に第11飛行師団長を呼び、わが軍の飛行隊の力量なら敵に大きな打撃を与えることができると勝利の信念を抱かせ、第11飛行師団はわれわれの戦略的企図に合わせて飛行隊の戦闘行動を積極的に展開し、反攻撃に移った人民軍連合部隊の戦闘行動を支援し、後方の重要対象を敵の空中攻撃からしっかり防衛するよう指示した。

そして、飛行隊の主力を人民軍の主攻撃方向へ行動させる

と同時に、敵の兵員と重要軍事施設、輸送路を打撃し、追撃飛行隊の一部は汶山、浦泉地域に対する空中偵察と襲撃飛行隊の戦闘行動を掩護するようにした。

主席の命令を受けた朝鮮人民軍飛行隊は、南進する人民軍を掩護しながらソウルに向かって果敢に突進した。

6月25日の朝、人民軍連合部隊とともに反攻撃に移った朝鮮人民軍第56追撃機連隊は、金浦飛行場、水原飛行場、永登浦飛行場にその基地を置いていたかいらい空軍の飛行隊と運輸機材、燃料油タンクを攻撃した。

その攻撃によって敵は、保有数の半分に達する20余機の飛行機と数多くの燃料油、数十台の自動車を失った。当時かいらい空軍は80余人の飛行士と各種の飛行機40余機を保有していた。

飛行機と燃料油タンクにあったおよそ1万トンの燃料油を失った金浦飛行場のかいらい空軍は、26日、再び第36襲撃機連隊の攻撃を受けて数機しか残っていなかった飛行機さえ失い、それ以上戦力を回復することができなくなった。

27日には、永登浦飛行場に集結していた敵機8機が第56追撃機連隊の攻撃によって焼失し、辛うじて離陸して抵抗しようとした2機の敵機も人民軍の追撃機によって墜落した。

28日、朝鮮人民軍飛行隊はかいらい空軍の残りの飛行機が集結している水原飛行場を爆撃して、敵の最後の追撃機「F－38」と大型爆撃機、砲指揮機を焼き払い、かいらい空軍の最後の息の根を止めるための攻撃戦を続けた。

29日、平康に駐屯していた第56追撃機連隊の追撃機編隊は、鉄原—漣川—ソウルを経て水原へ飛行する第36襲撃機連隊の襲撃機に対する護送任務を遂行し、彼らと共に水原飛行場にあった8機の敵機を残らず焼き払った。

こうして、わずか数日間にかいらい空軍は朝鮮人民軍空軍の攻撃によって一機の飛行機もろくに出撃できずに完全に掃滅され、結局、戦争が終わるまで戦力を回復することができなかった。

「ソ連が朝鮮戦争に参戦しない限り、あなたたちは空中攻撃を受けることがないだろう」と言って李承晩かいらい一味をあおり立てていた米国は、朝鮮人民軍飛行隊の連続攻撃にかいらい空軍がことごとく壊滅すると、慌てふためいて自分の空軍武力を増強しはじめた。

米国は第19重爆撃機連隊の重爆撃機「B—29」をはじめとする爆撃機80余機を朝鮮戦線に引き入れ、複数の戦闘爆撃機連隊の戦闘爆撃機440余機と各種艦船の艦載機345機、戦略・戦

術偵察機72機、輸送機15機、米第8軍飛行機108機を含む合わせて1100余機の飛行機を朝鮮戦線に投入した。

敵は、6月26日から共和国北半部の平和的都市と農村を爆撃しはじめた。

6月29日、マッカーサーは傾きかけた戦況を好転させる目的で、米極東空軍司令官メイヤー、参謀長アルモンドなどの高級将校を伴って専用機で日本の羽田空港を発ち、朝鮮への前線「視察」に向かった。

飛行機が玄海灘を渡って目的地の水原上空を近くにしていた時だった。前方を監視していた米極東空軍司令官が「敵機だ！」と叫ぶと、飛行機に乗っていたマッカーサーの随員はみな肝を冷やしていた。

窓越しに遠くの雲の中へ消える人民軍追撃機を見つけたのである。しかし、それよりもっと大きな危険がマッカーサーを待っていた。

まずは、マッカーサーを乗せた飛行機が着陸する場所がなかった。金浦飛行場はすでに朝鮮人民軍の手中に入り、水原飛行場はことごとく破壊されていた。マッカーサーの顔色はたちまち土色に変わった。随員たちは日本へ引き返すことを願っていた。

敵の出版物は当時の状況について、マッカーサーは度肝を抜かれて十字架を引き、「機内で北朝鮮軍の飛行場を爆撃しろと命令」し、悲鳴を上げたと報じた。

ホワイトハウスの追及を恐れて引き返すこともできなかった彼らは、滑走路がほとんど破壊された水原飛行場にやっと着陸した。飛行機を降りたマッカーサーが迎えに出た李承晩やムチョー(当時の南朝鮮駐在米大使)と「会談」を行おうとしたその瞬間、人民軍追撃機が急降下しながら機銃掃射を浴びせはじめた。

マッカーサーは振り向きもせずに逃げ去り、李承晩とムチョーは飛行機の翼の下に隠れ、敵は飛行場での「会談」を放棄してしまった。

米軍はこの日から、自分らが「空の要塞」だと誇っていた重爆撃機「B―29」を出動させはじめた。

重爆撃機「B―29」はまるで幻想世界の巨大な怪物を思わせた。胴体の長さは普通の戦闘機の3倍もあり、長い両翼につけた4つの重い発動機とそのプロペラ、胴体に描いた不気味な紋様は、あたかも醜い翼竜が翼を広げて飛ぶかのように見えた。

爆弾積載量は9トンで、8門の機関砲を装備し、防弾装置まで備わっているこの爆撃機は、第2次世界大戦中に１機も撃墜

されたことがなく、米軍は「空の要塞」と呼んでいた。

太平洋戦争で勇猛を発揮したという日本軍の特攻飛行士も、肉弾になって「B―29」を攻撃したが、その側にも近寄れずに強力な火力に遭ってみな撃墜され、それ以来この爆撃機の名を聞いただけでも恐れをなして対戦する考えもできなかったという。

しかし、朝鮮の勇敢な飛行士たちは開戦15日後に米軍が「空の要塞」だと誇っていた爆撃機「B―29」とジェット機「F―80」を撃墜して、敵の「空中での優勢」をことごとく粉砕した。

マッカーサーが水原に足を踏み入れた6月29日。

第56追撃機連隊の李興富、李文順の二機編隊は、前線地帯の偵察飛行中、仁川、ソウル上空から4機の巡察機の護衛を受けながら北方に飛行する2機の「B―29」を見つけた。

基地を発つ前に「B―29」をはじめ米機が平壌の上空に現れて絨毯爆撃を加えたという話を聞いた彼らは、憎悪の念に駆られていた。

彼らは指揮所に敵情と共に戦闘に進入するということを報告した。指揮所ではそれを承認し、その時編隊を導いて漢江に沿って西方の富川上空で警戒飛行に当たっていた金基玉飛

行中隊長に李興富、李文順の二機編隊を支援する命令を与えた。金基玉の編隊はすぐそこへ機動した。

当時、敵の「B—29」との空中戦は、その後の朝鮮人民軍空軍の行動方向において全般的な戦闘士気と勝敗を左右する重要な戦闘だった。

人民軍の二機編隊は「B—29」を攻撃するために急上昇した。敵の巡察機も人民軍飛行機に対抗するために高度を高めた。人民軍の二機編隊は敵の巡察機の側面射撃にもかかわらず目標とした「B—29」と同じ飛行方向に上昇して、高度の差が500メートルぐらいになると降下しながら400メートルの距離で射撃を始めた。

すると、敵機は胴体の左右や機尾などあちこちの火力機材から射撃を始めた。

敵機は依然として航路を変えなかった。その火力は大したものだった。それを切り抜けて近づくのは非常に難しいことだった。

前後から降りかかる交差火力が人民軍編隊を脅かしてますます追い詰めた。

この時、金基玉の属していた編隊がそこに到着して戦闘に加わった。彼の編隊が矢のように急降下しながら集中射撃を

浴びせると、敵の巡察機はその企図をあきらめてあたふたと散っていった。その隙に乗じて二機編隊は「B—29」の主導機を狙って高度を高めた。今度は「B—29」の火力の空間を見つけなければならなかった。

李興富大隊長は李文順を呼び出して自分が先に攻撃すると知らせ、敵機の火力分布を監視しながら自分の後について大胆に突入するよう命令した。これは、決死の覚悟を持った人だけが下せる決心だった。

大隊長が単独で突破口を開く決心をしたと分かった李文順は、自分が先に攻撃すると提起した。しかし大隊長は重ねて2番目に攻撃するよう断固と命令し、北方に向かって飛び続ける「B—29」の側面を猛烈に攻撃した。

すると「B—29」のあちこちから銃弾・砲弾が発射された。主導機の機体から立ち上る煙を見た戦友たちは早く脱出せよともどかしげに叫んだが、李興富大隊長は最後の力をふりしぼって、李文順に敵機の胴体の下へ攻撃するよう命令して英雄的な最期を遂げた。

李文順は主導機に集中していた敵の火力が収拾される前に、すばやく弾幕の隙間を切り抜けて大胆に敵機に突入した。照準鏡に500メートル、400メートルとクローズアップす

る憎らしい敵機の胴体を狙って、彼は射撃ボタンを押した。

タタタ、タタタ……。　ひっきりなしに発射される曳光弾が敵機の胴体で火花を散らした。すばやく機首を回して抜け出した李文順は、すぐ高空から急降下して加速度を得、敵機より高度を少し低めてから再び攻撃した。

慌てた敵機はあちこちで銃弾を乱射したが、到底李文順の攻撃を防ぐことはできなかった。

彼の飛行機から発射される曳光弾は続けざまに敵機に当たり、無数の火花を散らした。

ついに「B—29」の胴体から赤黒い煙が立ち上った。しばらくして幾筋かの煙が激しく噴き出し、機内の爆弾が爆発してまぶしい閃光とけたたましい爆音が相次ぎ、「B—29」の巨大な胴体はまたたく間に粉みじんになってしまった。

実際、朝鮮の飛行士の飛行経歴は敵軍の飛行士に比べて非常に短かった。普通、飛行士の実力は飛行時間によって決まるという。そうしてみると、敵は大体第2次世界大戦にも参加し、1000時間以上の飛行経歴を持つベテランだった。

それに比べると、人民軍の飛行士たちは飛行経歴がわずか40時間ほどしかない新兵と言えた。結局、朝鮮の飛行士が空中戦でも奇跡を起こしたのである。

金基玉も戦友たちと共に在来式飛行機をもってジェット機「F—80」を最初に撃ち落として米国の傲慢な鼻柱をへし折った。

1950年7月初めのある日、彼が属した追撃機編隊は出撃して間もなく、ソウル上空で敵機編隊と遭遇した。

この「F—80」は爆撃機の一種で、機体の爆弾を地上に投下した後は追撃機の使命も果たすが、両翼の補助燃料油タンクまで落とせばスピードをさらに出すことができた。

当時、「F—80」のスピードは人民軍飛行機の2倍もあり、搭載した爆弾以外に6門以上の機関砲や機関銃を装備していた。そのような敵機と対決しても金基玉は少しもひるまず、今日は必ず決着をつけようと決心した。

素早い速度で人民軍飛行機を追い越した敵機は、主導機の後について遠くの空間へ円を描きながら一列で飛んでいった。そのスピードは、あたかも餌を狙って飛びかかるワシのように速かった。

敵の主導機は金基玉の後をつけようと執拗に襲いかかったが、そのたびに彼は左右に急上昇、急降下しながら「F—80」の弱点をとらえた。それは、スピードが速すぎてその分旋回半径が大きいということだった。

彼は正面攻撃で敵機を撃墜する決心を隊列機に報告した。隊列機は金基玉が容易に攻撃できるように他の敵機をけん制した。敵の主導機が再びスピードを出して攻撃してきた。一、二、三……と、後を追う敵機との距離を見計らった金基玉は、敵機が近づくと急降下して振り切った。彼は機首を上げて、旋回してくる敵機の正面に向かって突入した。

金基玉が正面から肉迫してくると、敵の飛行士は慌てて先に射撃を始めた。

敵機との距離はわずか数百メートル……。

敵の飛行士の顔が見分けられるほど近くなった。またとない最後の攻撃の機会だった。

彼は敵機に向かってそのまま突入しながら射撃ボタンを押した。驚いた敵機は射撃を避けようと機首を上げたが、もう遅かった。機首を上げて現れた胴体の腹部に敵撃滅の銃弾が命中し、炎が燃え上がった。

赤黒い煙に包まれて上に飛び上がった敵機は、火炎の螺旋状の曲線を描きながら地面に墜落した。

けたたましい爆音と共に敵機は跡形もなく飛び散った。

これがまさに、在来式飛行機と最新型ジェット機との対決、40時間と1000時間の飛行経歴の対決であり、それは今後

の戦争の結末を予告していた。

天安、大田上空における空中戦で一日に「B—29」を含む2機の敵機を撃墜した李東奎、平壌の空を守って毎日のように出撃して多くの敵機を掃滅し、火がついた飛行機と共に敵艦船に肉迫する最後の瞬間まで復讐の銃弾を撃った金和龍、姜勝賢……。彼らによって「B—29」や「F—80」をはじめとする数多くの敵機が撃墜された。

祖国解放戦争の日々、金基玉、李文順、李東奎、白基洛、金和龍、姜勝賢をはじめとする多くの飛行士が共和国英雄の称号を授かる光栄に浴した。

「スミス先遣隊」の壊滅

南進する人民軍の隊伍に、7月5日、烏山界線に米軍の地上部隊が現れたという急報が伝えられた。

李承晩かいらい一味をそそのかして侵略戦争を引き起こし、海軍と空軍だけを支援するといった米国侵略者がやがてその正体をさらけだして、地上軍を朝鮮戦線に大々的に展開しはじめた。

それまで欺瞞的な「解放者」の仮面をつけていたヤンキーは、とうとう銃や刀を振りかざし、朝鮮人民の敵として公然と前線に現れたのである。

歴史を振り返ると、朝鮮人が初めて米国という国の存在を知ったのは1855年6月だった。そのとき、江原道通川の沖合いでしけに遭って生死の岐路に立たされていた4人の西洋人を救助したことがあった。

国籍も知らず言語も通じない西洋人を助けた朝鮮人は、人道主義的な好意を持って彼らを清国にまで送ったが、その時になってはじめてその4人の遭難者が米国人であり、太平洋

を越えた遠い所に米国という未知の国があるということが分かった。

しかし、米国は朝鮮の雅量と善意に、「シャーマン」号をはじめとする侵略船を侵入させて朝鮮に対する侵略と武力干渉を頻繁に強行し、しまいには公然と侵略戦争の火をつけることで応えた。

これは朝鮮人民の憤怒を買った。

当時、李承晩かいらい軍をもってしてはそれ以上侵略戦争を続けることができないと考えたマッカーサーは、米国大統領トルーマンの承認の下に、1950年6月30日、米第8軍司令官ウォーカーに「常勝」と「精鋭」を誇る米第24歩兵師団を朝鮮戦線に出動させることを命じた。

これを受けて師団長ディーンは、米第24師団で最も戦闘経験の多い400余人を選んで「先遣隊」を編制し、そこに米第52野砲大隊を配属させ、「先遣隊」の隊長として第21連隊第1大隊大隊長スミスを任命した。

スミスは、1941年12月に日本軍がハワイの真珠湾を攻撃した際に中隊長として防衛戦に参加し、大きな「手柄」を立てて上司に寵愛されていた。

ディーンは日本を発つスミスに、釜山—ソウル間の道路に

沿って北上しながらなるべく北方で人民軍の進撃を阻み、師団の主力の戦闘展開を保障する任務を与えた。

「スミス先遣隊」は、1950年7月1日の朝、日本の板付空軍基地から6機の大型輸送機「C—54」に乗って釜山に到着し、翌2日に列車で大田に入った。

2日後に大田に入ったディーンは、「スミス先遣隊」を烏山界線に投入して防御陣を築くようにした。

「スミス先遣隊」は7月5日、米国の軍服を着た旧日本軍将校の案内を受けて自動車行軍で烏山北方の錦岩里界線に進出して、118高地とそのそばを走る鉄道沿線と道路周辺に陣地をつくった。

スミスは、朝鮮人民軍がいくら強いとしても最新式武器で装備しており、長い戦闘経験と勝利の「伝統」を持つ自分らにはあえて立ち向かうことなどできないだろうと虚勢を張り、米兵たちも逃走するかいらい軍を非難し、これからの戦闘での勝利者は自分たちだと豪語した。

当時、米国の御用出版物は「スミス先遣隊」が傾きかけた戦況を好転させる何らかのカギでも持っているかのように大げさに宣伝した。

交戦双方の耳目は京畿道烏山に集中した。

それは、長い侵略の歴史と最新武力装備を持つ米地上軍と歴史の浅い人民軍との最初の交戦結果が朝鮮戦争の前途に影響を及ぼしかねないからだった。

果たして世界「最強」を誇る米軍、それも「常勝師団」として知られた米第24師団の「先遣隊」との対決で人民軍がいかに対応し、「戦いの運命」はいかに決まるだろうか。

金日成主席は、当面の情勢と米国の企図を科学的に分析し、前線連合部隊をして水原一帯でかいらい軍の残存勢力を包囲せん滅した後、迅速に平沢方面へ進出して米軍部隊に決定的な打撃を加えるようにした。

主席は，人民軍部隊が米軍先遣隊と遭遇すれば直ちに撃滅できるように万端の戦闘態勢を整え、引き続き攻撃速度を高めるよう命令した。

主席が主打撃対象を米軍に定め、力を集中して掃滅するようにしたのは、自国の陸軍の兵力まで朝鮮戦線に投入して崩れた前線を収拾し、瓦解したかいらい軍の士気を盛り上げようとする米国の企図を粉砕するための措置だった。

攻撃命令を受けた人民軍戦車兵たちは天をも衝く勢いで米軍先遣隊に正面から立ち向かった。第9戦車旅団の先頭に立って敵を追撃していた尖兵中隊の戦車は、5日の朝、烏山北方の

錦岩里界線で米軍の先遣隊に遭遇した。

「米軍を発見！」と報告した先頭戦車区分隊は、5〜6キロ後ろにある主力部隊の到着を待つことなく前進過程に突撃へ移った。敵背に入って米第52野砲大隊の105ミリ曲射砲陣地を残らず鎮圧・掃滅し、西亭里一帯へ進出して敵の退路を遮断することで彼らの退却と増援を阻止した。

こうした有利な機会を利用して、後に続いていた主力戦車も米軍を容赦なくひき殺し、退却する敵を機関銃火力で掃滅した。

歩兵部隊の戦闘員たちも突撃へ移って敵を撃滅した。

悪名の高かった「スミス先遣隊」は、銃弾や砲弾もろくに撃つことができず、わずか2時間にして壊滅した。

スミス「先遣隊」は370余人が殺傷され捕虜になって完全に壊滅した。スミスはあれほど自慢していたバズーカ砲を一発も撃てず、鉄かぶとと上着、軍靴まで脱ぎ捨てたまま幾人かの部下と共にやっとの思いで安城へ逃げた。

「スミス先遣隊」の壊滅は、マッカーサーの主力部隊を自称していた米第24師団の崩壊を告げる信号弾のように特別ニュースとして全世界に報じられた。

米国のある従軍記者は烏山戦闘について「烏山の悲劇」

「敗北の端緒を告げる戦闘」と書き、日本の軍事専門家は「朝鮮戦争における米軍の初の戦いは惨敗として記録」され、「米軍の悲劇的な敗走の序幕」が開かれたと揶揄した。

米軍に賛辞を惜しまなかった資本主義世界の御用出版物も、「軽傷者は連れてきたが、重傷者は星条旗を覆って残してきた」「日が暮れて安城に到着してみると、敗残兵の中に……鉄かぶとと上着、靴まで脱ぎ捨ててきた者が少なくなかった」「朝鮮戦争における米軍の緒戦は惨敗として記録された」と伝えた。

スミスも、自分らの惨敗について次のように告白した。

「今日わたしは九死に一生を得て危機から免れた。

……われわれは勇猛果敢な人民軍の強力な攻撃に銃弾一発もろくに撃つことができずに追われて死んだ。

勝利は始めから不可能なものだった。

人民軍はわれわれの考えよりはるかに強大であり、その反面、米軍はわれわれが自称しているように強い軍隊ではないということが証明された。

1950年7月、われわれというよりも米軍が惨敗を喫したこの月をいつまでも忘れそうもない。

あまりにも大きな傷を負った衝撃のため、敗北意識から抜け出すのは容易でないということは、わたし一人だけの考えではないだろう」

この日は米国の時間で7月4日、米国の独立記念日だった。

人民軍は、米軍は決して強敵ではなく、打てば倒れるかかしのようなものだという痛快感を覚えて連続攻撃作戦を繰り広げ、仁川、平沢、安城、堤川、寧越、三陟など各地域を解放して37度界線に進出することによって、連続攻撃作戦の作戦的方針を成功裏に貫徹し、大田への進撃を続けた。

現代包囲戦のモデル—大田解放作戦

戦争開始後3日ぶりに敵の牙城であるソウルを一挙に解放した人民軍連合部隊は、金日成主席が示した作戦的方針に従って錦江を渡河し、大田地域で米軍とかいらい軍を包囲せん滅するために攻撃速度をさらに速めながら敵陣の深くへと戦果を拡大していった。

1950年7月16日9時30分、ソウルにある前線司令部では金日成主席の指導の下に大田包囲に関する作戦会議が行われた。

前線司令部参謀長姜健が7月14日以後の戦況を報告した。報告では人民軍連合部隊の錦江渡河状況と進出界線、敵の企図が具体的に説明された。

当時、人民軍のソウル第3歩兵師団とソウル第4歩兵師団は錦江を成功裏に渡河してから攻撃成果を拡大しながら敵を大田へ圧迫しはじめ、第6歩兵師団の主力もソウル第4歩兵師団の右翼で戦果を上げていた。

ソウル第105戦車師団は16日現在、公州方面で渡河を行っていた。問題は第2歩兵師団の進出だった。

大田東南方界線に進出して敵の退路と増援路を遮断する任務を受けた第2歩兵師団は、清州南方ピバン嶺界線で苛烈な戦闘を展開したが、まだその界線を越えられなかった。

結局、所定の時間が過ぎても大田包囲任務を遂行できずにいた。

他方、敵も大田を固守しようと必死になっていた。

マッカーサーはもともと錦江界線で米第24歩兵師団が人民軍の進撃を「撃退」した後、仁川に上陸することになる米第1騎兵師団と合流して新しい攻撃へ移る「ブルー・ハート作戦」なるものを計画していた。

しかし、人民軍の攻撃によって錦江防御線が瞬時にして崩れたので、その作戦計画は反故になってしまった。

慌てたマッカーサーは日本の横浜から仁川に向かった米第1騎兵師団長ゲイに「上陸地点を仁川から東海岸の浦項に変更」し、上陸後大田方面へ急遽進出して米第24師団長ディーンを支援するよう命令した。

そうして、海上で右往左往していた米第1騎兵師団は、船首を東海岸の浦項に回さざるをえなくなった。

米第1騎兵師団は数多くの侵略戦争で米軍の先頭に立った、「無敵」を誇る集団だった。マッカーサーは、米国式「屠殺

戦法」でインディアンを集団虐殺することで悪名を馳せた米第1騎兵師団を「無敵の師団」として押し立て、日本占領軍として日本に駐屯させていた。師団長ゲイは数十年間の軍隊生活期間「後退を知らずに過ごした」と威張り、人民軍の進撃を自分の師団が壁のように防ぐだろうと豪語した。

このように、マッカーサーは米第24師団に続いて米第1騎兵師団まで送り込んで大田をどうしても固守しようと企んでいた。

このように事態は緊迫し、大田をめぐって彼我は時間との戦いを行っていた。

南進する人民軍主力部隊が早急に大田を占領して米第24歩兵師団とかいらい第1軍団の基本集団を包囲せん滅するのは、第3次作戦の遂行において基本となっていた。

第3次作戦が遂行されると、敵が前線西部へ機動できなくして大邱を直接脅かし、敵の前線がつながっていない隙を利用して南海岸への攻撃成果を容易に拡大していくことができた。

姜健の報告を注意深く聞いた金日成主席は、再び地図に目をやり、第2歩兵師団を督促するのもよかろうが、われわれは予備方案も持っていなければならない、第2歩兵師団が攻撃成果を拡大できない場合、敵の退路を遮断する任務をソウル第4歩兵師団に与えなければならないと確信を持って語った。

続けて、第83オートバイ連隊を道路網が発達し、平地である前線西部の予備隊に回す方案を示し、前線の主攻撃方向の連合部隊に対する兵器、弾薬、食糧の保障対策をきちんと立てるよう強調した。

主席は、大田包囲作戦をどうしても実現させなければならないとし、ソウル第3歩兵師団とソウル第105戦車師団が大田北方と西北方から大田に集結した敵を圧迫するようにし、第2歩兵師団は大田東南方向の道路を占めて敵の退却と増援を防ぎ、ソウル第4歩兵師団は論山—南原方面へ、第6歩兵師団は右翼を確保しながら江景方面へ攻撃することによって、大田解放作戦に有利な条件を作らなければならないと言った。

そして、ここで一番問題となるのは清州南方で行動する第2歩兵師団が計画通りに敵の防御を突破し、大田東南方向に進出できるかということであるとし、戦況がいかに変わるかはさらに見守らなければならないが、現在大田解放作戦に参加した前線連合部隊の位置と攻撃速度からしてこのような予備方案を持っていなければならない、ソウル第4歩兵師団の基本兵力を大田方面へ進出させれば、その師団が攻撃していた方面に空間が生じる恐れがある、この空間を埋めるには第6歩兵師団から1個連隊をソウル第4歩兵師団が攻撃していた方面へ

進出させなければならない、西南海岸方面では第6歩兵師団だけでも十分に敵を掃滅することができるだろう、と言った。

主席は再び、自分はソウル第4歩兵師団を大田方面へ機動させることを決心した、まず、ソウル第4歩兵師団の1個連隊を大田東南方向に進出させて大田—永同間、大田—錦山間の大道路を遮断すべきである、第18歩兵連隊にこの任務を与えれば立派に遂行できるだろう、と言った。

主席が打ち出した作戦方案は実に妙案だった。そうして、清州界線の敵の防御を突破することばかり考えていた作戦メンバーは、湖南方面へ進撃している第18歩兵連隊を迂回させて大田包囲の空間を埋めることができるようになった。

主席は大田包囲の妙案を示し、包囲した敵をすばやく掃滅できる方法も明示した。

主席は、大田の包囲を実現した後は包囲された敵に息をつくゆとりを与えずに決定的な打撃を与えなければならない、そのためには、大田北方と西北方向から攻撃する連合部隊が敵に強力な正面攻撃を加える一方、小部隊を大田市内に送り込んで敵を不意打ちすることによって敵の内部を混乱させ、大田東南方向へ進出した部隊は敵の機動路を掌握して退却する敵と増援してくる敵を強力な火力打撃をもって掃滅しなけ

ればならない、と言った。

そして、前線司令部参謀部では大田解放作戦に参加する人民軍連合部隊が7月20日まで大田地域に集結した敵を完全に包囲せん滅し、迅速に次の作戦へ移るようにすべきだと言った。

主席は人民軍の指揮メンバーに、時間をかせぐのが極めて重要である、日本を発った米第1騎兵師団が浦項に上陸するならば、2日間で十分に大田界線に進出することができる、早く作戦組織を抜かりなく行い、任務を明確に与えて部隊を行動させなければならない、と言った。

1950年7月18日、金日成主席の命令に従って大田地域の敵に対する人民軍の包囲作戦が始まった。

忠清南道に位置している大田は、嶺南と湖南地方を結ぶ軍事戦略上の要衝であり、ソウルから追い出された敵が「臨時首都」に宣布した重要な拠点だった。このことから米軍は大田を防御するために、自分らの「精鋭部隊」を大々的にこの界線に投入した。

ディーンは、師団の全兵力を集結して急いで防御を手配した。

こうした状況下で人民軍連合部隊は、敵の増援部隊が到着する前に迅速に大田地域の米第24師団を包囲せん滅しなければならなかった。

強行軍をする朝鮮人民軍の戦闘員たち

論山界線に進出するソウル第4歩兵師団第18歩兵連隊の戦闘員は、敵背の退路を遮断するための強行軍を断行した。

彼らは、歩兵銃と自動短銃、1.5戦闘規定量分の弾薬と3日分の食糧、1～2発の82ミリ迫撃砲弾を背負い、10余里の距離を一夜に行軍して戦闘陣地を占めた。

ほとんど同じ時刻に他の区分隊は大田—錦山間道路を完全に遮断した。

大田西北方向から攻撃した人民軍戦車兵たちは、7月19日、楡城を解放し、戦果を拡大しながら大田へ勢いよく進撃した。

大田に向かって進撃する朝鮮人民軍戦車

人民軍飛行隊はこの時期、数的に優勢な米軍の飛行隊と決戦を繰り広げて、歩兵と戦車兵の進撃を頼もしく支援した。そして敵の飛行場、集結区域、鉄橋、軍用列車をはじめとする敵背の重要対象を爆撃することによって、敵の地上部隊の軍事行動に混乱を与えた。

このように、金日成主席の作戦的意図を必ず貫徹しようとする人民軍軍人の献身的な闘争によって、大田の南方と東南方の道路は全て遮断され、人民軍連合部隊はおよそ100平方キ

ロの地域に敵を追い詰め、大田を完全に包囲した。

人民軍部隊の行動がどれほど不意的で機動的だったのか、7月19日、大田南方の亀峰山で人民軍を発見したという捜索隊の報告を受けたディーンは、人民軍がいかに才気に長けていても、一夜にそこまで進出することはできないと言って、報告された事実を信じようとしなかった。

大田地域の敵を完全に包囲した人民軍の絶妙な行動と戦術について、朝鮮戦争に参加した米軍将校フェレンバークは、後日、『実録・韓国戦争』という図書に次のように書いている。

「彼ら(人民軍を指す)は防御軍(米第24師団)を正面攻撃してその自由を拘束し、後退を余儀なくさせる一方、迂回または浸透の方法で防御軍の背後へ進出してその退路を遮断する戦術を使った。ある特定の時点でディーンであれ他の指揮官であれ、後方の状況を把握するのは不可能なことだった。それは、よく整った前線を維持するヨーロッパ式経験を積んだ米軍指揮官がすでに時機を逸した時まで把握できなかった戦術だった」

大田一帯の敵を完全に包囲した人民軍連合部隊は、包囲された敵を掃討するための戦闘を始めた。総攻撃に先立って2台の戦車と歩兵1個区分隊からなる小部隊が不意に大田市内に突

入した。戦車兵は市街に群がり集まっている数十台の敵の自動車を押しつぶしながら市内へ突進して、敵の統治機関と重要対象を破壊した。

418号戦車は大田駅で敵の機関車と燃料油倉庫を焼き払い、抵抗する敵を機関銃火力で制圧し、422号戦車は大胆に機動しながら敵の集結場を攻撃した。

大田市内に突入した人民軍戦車が2台しかないということを知った敵は、死に物狂いになって抵抗した。

戦車兵は歩兵と共に激しい火力戦闘を展開して敵に甚大な打撃を与え、敵陣を混乱に陥れた。

大田市内に突入する朝鮮人民軍機甲部隊

こうした時の7月20日未明、命令を受けた人民軍連合部隊が大田を解放するための総攻撃を開始した。

まず大田北方で行動していた戦車部隊と歩兵連合部隊が攻撃に移った。人民軍の烈しい砲撃が敵陣を撃破した。戦車区分隊の攻撃に続いてオートバイ兵が矢のように走り出しながら機関銃射撃を浴びせた。

大田の北方と西北方、西方と西南方から攻撃を開始した人民軍歩兵たちも市内に進撃した。熾烈な激戦があちこちで続いた。市内で行動していた戦車兵と歩兵が主力部隊と合流した。

人民軍戦車兵たちは大田市街の中心を猛烈に攻撃しながら敵を容赦なく掃滅した。戦車の後について前進していた歩兵たちは、混乱に陥った敵を掃滅しながら市街の主要対象を一気に占領した。

これと時を同じくしてある襲撃組は大田西方で155ミリ曲射砲陣地を一撃の下に襲撃・掃討することによって、敵の砲兵火力システムを完全に麻痺させた。

人民軍砲兵たちは正確かつ周到な射撃で敵の砲陣地と砲弾倉庫、飛行場その他の施設を破壊し、敵兵を制圧しながら歩兵と戦車部隊の突撃を強力に支援した。

人民軍部隊の猛烈な攻撃が開始されると、敵は砲、戦車、

飛行隊の支援の下に必死に抵抗した。

大田市街に突入した人民軍戦車部隊と歩兵連合部隊は、包囲網を狭めて至る所で敵を容赦なく打ち倒した。敵の指揮システムや防御システムはまたたく間に乱れ、それ以上対抗する考えもできずに逃げはじめた。

「世界のどんな戦車も破壊できる」という説明文まで貼ってあるバズーカ砲で装備していた米第24師団第34連隊の敵兵は、人民軍戦車が現れると一発の砲弾も撃てずにみな逃げてしまった。

捕虜になった米第24師団長
ディーンと米軍

このようにして、新型武器と戦車部隊を朝鮮戦線に引き入れれば戦況が変わるだろうと信じてきた米軍の期待は完全に外れてしまった。

大田市内の米軍は命をつなごうと逃げ道を探して回り、指揮システムは完全に麻痺して連隊長までも師団長の命令に逆らい、逃げ道を探すのに汲々とした。

命拾いをするために見すぼらしい兵士服に着替えて大田から錦山方面へ逃げていた米第24師団長ディーンも捕虜になった。

人民軍を避けて36日間も山中をさ迷い、結婚記念30周年に当たる日に捕虜になったディーンの姿は惨めだった。ロビンソン・クルーソーを思わせるぼうぼうとした髭面に、体重も1カ月間に81キロから58キロまで減ったという。それでもディーンは、後日、共和国司法機関の予審員の前で、自分が捕虜になった日は人生において二番目にうれしい日だと言ったという。

大田を防御することができなくなった米軍は、砲弾をはじめとする軍需物資を残らず川に投げ込み、大田—錦山間道路に沿って逃げようとしたが、すでに退路を遮断していた人民軍の伏兵戦にかかって群れをなして倒れてしまった。敵はそれこそ、どの崖から転がり落ちた石なのかも知れずに打たれて死んだも同然だった。

錦山方面へ逃げようとしていた自分らの企図が失敗に終わると、敵は、今度は大田—永同間道路に沿って逃げようとした。すでにここを遮断していた歩兵部隊の戦闘員たちは、戦車を先頭に立たせて砲撃と機関銃射撃をしながら包囲を突破しようとする敵に容赦なき打撃を与えて残らず掃滅した。

7月20日、大田は完全に解放された。

人民軍はこの作戦で、米第24歩兵師団とかいらい軍第1師団、第7師団の兵力を完全に撃滅し、大田地域だけでもディーンを含む数万人の敵兵を殺傷または捕虜にし、数多くの戦車、自動車、数百門の各種砲、数万余挺の狙撃兵器をはじめとする兵器、戦闘技術機材を破壊・鹵獲する戦果を上げた。

大田解放戦闘で複数の部隊が近衛称号を授かり、9人の共和国英雄が輩出した。

大田解放戦闘で輝かしい勝利を収めたことにより、人民軍は、米軍の「強大さ」に関する神話をこなごなに打ち砕いた。

燃える島

1950年9月に至り、前線には重大な軍事・政治情勢がつくり出された。

朝鮮人民軍の怒涛のごとき反攻撃によって朝鮮から完全に追い出される危険に直面した米国は、自分らの惨敗を挽回し、全朝鮮を占領しようとする侵略的目的をどうしても達成するために「総攻勢」を繰り広げた。

米軍の「総攻勢」は、仁川に大兵力を上陸させてソウル一帯を占領させ、37度線と大田、原州一帯に進出して人民軍の前線と後方を遮断する同時に、洛東江界線で攻勢に出た米軍を仁川上陸集団と連合させて洛東江界線の人民軍主力を「包囲せん滅」することだった。

米国は「総攻勢」のための攻撃集団を二つに編制し、洛東江界線の狭い地域に2個軍団(第1、第9軍団)の全兵力とかいらい軍第1、第2軍団を投入し、仁川上陸作戦のためには米第1海兵師団、第7歩兵師団、第17連隊など複数の部隊をかき集めて米第10軍団を作り、2個の上陸梯隊を編制した。

これとともに、米第10軍団の仁川上陸を後押しする目的

で、米第7艦隊を基本として追随国及びかいらい軍の艦船をかき集めて第7連合艦隊なるものを作り、米第5空軍と極東海軍飛行隊に所属された約1000機の飛行機を動員した。

金日成主席は当面の軍事・政治情勢を科学的に見抜き、それに基づいて戦争第2段階の戦略的方針を示した。

それは、敵の進攻速度を最大限に遅らせつつ時間を稼いで人民軍の主力部隊を救出し、新たな後続部隊を編制して強力な反攻撃集団を形成し、計画的な後退を行うことだった。

この方針を貫徹するための最初のキーポイントがほかならぬ月尾島防衛戦だった。

月の尾のような形をしたとして名付けられた月尾島は、仁川市西方の800メートル離れた海上にある0.66平方キロの小さな島であり、海岸線に青松が生い茂って毎日のように遊覧客で賑わっていたところだった。

月尾島は小さくてもソウルの関門である仁川の最南端に位置している島で、防波堤によって仁川市街と続いており、仁川港に通じる水路を塞いでいて、軍事戦略上極めて重要な位置にあった。米軍が仁川地区に上陸するには、必ず月尾島を通過しなければならなかった。

米軍は仁川上陸作戦に5万余の大兵員と数百隻の艦船、約

1000機の飛行機を動員した。

当時、月尾島には4門の砲を持つ朝鮮人民軍海軍司令部直属第76海岸砲兵連隊第2大隊第4中隊(中隊長は李大勲)と第64海岸歩兵旅団第2大隊第6中隊が配置されていた。

米軍は1950年9月10日から数多くの艦船と飛行隊を動員し、月尾島に対する爆撃と砲撃を開始した。

3日間も続いた砲撃や爆撃によって、生い茂っていた島の木々は残らず根こそぎになって焼き払われ、岩石はこなごなに砕かれ、海水さえぐらぐら沸き立つようだった。

上陸を開始した9月13日にも早朝から米軍の数百門の艦砲が砲弾を飛ばし、各種の戦闘機と艦載機がガソリン・ドラム缶と爆弾を投下した。

飛行隊の爆撃が終わると、米軍の艦船は上げ潮に沿って航跡隊形を作り、廃虚と化した月尾島へ向かった。

駆逐艦と砲艦、重巡洋艦、上陸艦と掃海艇は月尾島の2000メートル先まで接近してきた。月尾島の上空では数多くの戦闘機が威力を誇示するかのように旋回しており、燃える月尾島は全ての生命体の息が絶えたような静寂に包まれていた。

しかし、月尾島には砲火の中でも屈しない不死鳥も同然の

勇敢な人民軍勇士たちがいた。

敵の艦船が800メートル先まで近づいたという観測分隊長の報告を受けた中隊長は、力強い声で射撃号令を下した。やがて月尾島の海岸砲が一斉に砲門を開けた。

初発から命中だった。まず3番目の駆逐艦がたった数分間に9発の砲弾に打たれて炎に包まれた。戦場を眺め渡していた中隊長は、今回は先頭の駆逐艦を打てと命じた。

想像を絶する敵の艦砲射撃が全島を揺り動かした。

あちこちで土柱が立ち上り、黒い煙を吐いて燃え広がる火炎が戦闘員たちの全身を包んだ。砲手たちの顔は汗とほこりにまみれ、全身が血みどろになったが、砲弾を運び、撃ち、また撃った。

先頭の駆逐艦が3発の砲弾に打たれ、水路を塞いだまま炎に包まれた。駆逐艦の後でうろついていた上陸艇も逃げる暇もなく炎に包まれて右往左往していた。

戦闘隊形の腰が切られた敵は、慌てて月尾島に砲弾を雨あられのように発射した。

苛立たしく時計をのぞき込んでいた中隊長は砲弾を節約するよう命令し、射撃をしばらく中止させた。

引き潮が始まって島の砂浜が広くなり、海底が現れる

と、敵の艦船は逃げることもできずに泥の上に乗せられるからだった。

敵も引き潮に気付きはしたが、すでに後の祭りだった。もう数多くの艦船が泥の上に乗せられ、海上に浮かんでいた艦船も退却しようとすると、撃破された駆逐艦が水路を塞いでいた。敵の艦船は生きる道を求めて、その駆逐艦に砲身を回して道を開けと自分同士で射撃までしていた。

指揮所でこれを見ていた中隊長は、今度は照準射撃で敵に復讐の砲火を浴びせよと叫び、今一度射撃号令を下した。海岸砲が再び火を吐くと、慌てふためいた敵の艦船からは次々と炎が燃え上がった。

初日の戦闘で李大勲中隊は敵の駆逐艦2隻を撃破し、小艦艇2隻を撃沈した。

業を煮やしたマッカーサーは翌日の上陸作戦を直接指揮し、3時間以上にわたって月尾島に1730余発の艦砲射撃と無差別的な爆撃を行った。

敵の艦船が海岸に近づくと、海岸砲は猛射撃を浴びせた。

１隻の駆逐艦が黒い煙を吐いて傾きながら撃沈され、その陰でうろついていた4隻の上陸艇が命中弾に撃たれて撃沈された。敵の上陸隊形では混乱が起きた。しばらくして逃げよう

としていた2隻の上陸艦がまた撃沈された。敵の上陸企図はまたもや破綻した。

月尾島は文字通り沈まぬ不屈の戦艦も同然だった。中隊の損失も少なくはなかった。2門の砲が破壊され、犠牲者も出た。砲弾もいくらしか残っていなかった。

生き残った戦闘員さえも疲れ果て、大多数が重傷を負っていた。犠牲になった戦友の遺体を埋葬した中隊員たちは、復讐を誓いながら崩れ落ちた砲陣地と塹壕を築き直し、砲を整備した。

2日間の上陸戦で失敗を重ねたマッカーサーは、9月15日2時30分、総出動命令を下した。満潮が始まる時間を逃さない魂胆があったのである。

月の引力は厳しい戦争に関係なしというふうに、数千年の間続いた満潮と干潮を繰り返していた。

一番近い満潮時間は9月15日の6時59分と19時19分、日の落ちる時間は18時44分頃で、敵は絶好のこの機会を逃がせば1、2カ月後の10月11日か11月2日になって再び満潮を利用して上陸する機会を得られる。

ところが、10月以降は朝鮮西海でモンスーンが吹いて艦船の航行に不利だった。

それゆえマッカーサーは、なんとしても9月15日に運命をかけて上陸を断行する心算で、この日の未明、月尾島に対する無差別の爆撃と砲撃を強行した。

敵の飛行隊は月尾島の上空に100回以上も出動し、上陸する直前の15分間だけでもおよそ3000余の爆弾を投下した。

しかし、海岸砲兵たちと歩兵たちは敵の大上陸集団に真っ向から立ち向かって1門しか残っていない砲で最後の砲弾が切れるまで敵艦を撃ち、重機関銃、軽機関銃で敵の上陸艇に集中射撃を浴びせた。

中隊の激しい火力打撃で敵の上陸艇2隻がまた撃沈され、敵の先遣隊は干潟地の底に群れをなして倒れた。

敵の戦車が中隊の陣地へ攻撃して来た。

李大勲中隊長は最後の決戦を準備した。

中隊は、金日成主席の戦士らしく最後まで戦うという月尾島防衛者の切なる心情と固い誓いをこめた最後の電文を送った。最後の電波が飛んでいくことと同時に、李大勲中隊長は「諸君！　金日成将軍のために突撃、進め！」と叫んで先頭に立って駆けつけていき、戦士たちもどっと押し寄せる敵との肉迫戦に出た。

このように、月尾島の防衛者たちは9月13日から15日まで

の3日間、敵の駆逐艦3隻を含む各種の艦船13隻を撃沈・撃破し、敵の上陸を遅らせることによって、仁川―ソウル地域防御部隊に貴重な時間を与え、この地域の全般的防御作戦の遂行に大いに寄与した。

仁川、ソウル地区防御部隊も、14日間も敵の攻撃を防いで人民軍主力部隊の組織的後退を成功裏に保障した。

後日米国のAP通信は、南部前線の北朝鮮軍がいかに「国連軍」の追撃から抜け出したかというのは一つの謎のようなことであり、彼らは煙のように消えた、問題は、装備を備えた北朝鮮軍がどこに行ったかということだ、と報じた。

米国は人民軍の組織的後退を防いでみようと狂乱的な軍事的攻勢を強行したが、人民軍部隊と人民は困難かつ複雑な戦略的後退を成功裏に果たした。朝鮮人民軍は早い時日内に反攻撃兵力をしっかりと固め、1950年11月下旬から反攻撃を開始した。

清川江畔での大包囲せん滅戦

困難を極めていた戦略的な一時後退(1950年9月下旬～1950年11月下旬)が終わり、戦局は根本的に変わった。

ついに人民軍の強力な再進撃が開始されたのである。

1950年11月25日の夜から始まった朝鮮人民軍連合部隊の強力な反攻撃によって、マッカーサーがあれほど騒ぎ立てていた「クリスマス総攻勢」は破綻し、敵陣は崩壊しはじめた。

新たに編制された人民軍前線部隊の反攻撃も強力なものだったが、平安南道と江原道、黄海道一帯の山岳地帯に拠点を構えて、敵の補給路を破壊する一方、敵背を撹乱し、被占領地域を次々と解放しはじめた第2戦線部隊の闘争も激しかった。

当時、敵は前線に5個の軍団を投入し、数的、技術的優勢を誇りながら「総攻勢」を展開したが、数々の弱点を抱えていた。

まず、敵兵の中では、人民軍の頑強な抗戦と反攻撃で極度の不安に駆られて厭戦思想が蔓延し、逃亡者や戦闘忌避者が日増しに増えていた。

また、敵の作戦計画や指揮体系にも本質的な弱点が現れていた。

敵は二つの前線で互いの連係が保たれず苦しんでいた。

敵が占めている清川江河口から漁郎川までの前線の長さは100里余りに達し、米第8軍と米第10軍団は二つの集団に分かれて遠く離れ、依然としてまともな共同作戦ができずにいた。

それに、この二つの主力集団は、東京のマッカーサーの指揮を受けて独立して行動しているため、常に彼らの戦闘行動では混乱が生じていた。

国務長官だったアチソンも後日、『韓国戦争』という図書でこう慨嘆した。

「ウォーカー将軍麾下の第8軍は西部に、またアルモンド将軍の第10軍団は東部に配置されて互いに遠く離れており、彼らの側面は共産軍にそのまま露見していた。彼らの相互間の連携調整は東京から入ってくる情報に基づいていた。しかし、その情報を受け取った時点では、すでに30時間も遅れていた。それだけでなく、この二つの部隊はさらに分割された。彼らの間には互いにサポートする能力が欠けていた」

それだけではなかった。

敵は予備隊をほとんど前線に投じたが、兵員の補充がままならず、わずかな予備隊も人民軍第2戦線部隊の積極的な活動によって「反ゲリラ戦」に駆り出さなければならなかった。

自軍の事情がそうであるにもかかわらず、マッカーサーは自分を「東方のナポレオン」と自任し、トルーマンにクリスマス以前に朝鮮戦争を終結させると虚勢を張った。

マッカーサーは「クリスマス総攻勢」のために、前線西部には米第1軍団と米第9軍団をはじめ10余の精鋭師（旅）団を、前線東部には米第10軍団所属の5～6の師団を投入した。

金日成主席は、マッカーサーが「クリスマス総攻勢」を準備していた時期にすでに敵の企図を見抜き、「総攻勢」を総退却にするという遠大な作戦を練った。

1950年11月25日の朝、最高司令部の野戦指揮所に総参謀長を呼んだ金日成主席は、まず前線西部で反攻激を開始するという命令を下した。

主席の断固たる決心により、11月25日の夜から人民軍の反攻撃が開始され、敵の「クリスマス総攻勢」を水の泡にするための作戦が始まった。

前線西部でまず反攻激を開始した人民軍は、清川江畔で米軍に対する大包囲せん滅戦に移行した。

玉のように澄んできれいだとして清川江と名付けられたこの川は、朝鮮の中部地帯に流れる大河であり、安州、价川、球場、香山などを巡り流れている。

人民軍連合部隊の激しい反攻撃によって、米第8軍の攻撃隊形は砂上の楼閣のように崩壊し、凍てついた清川江の清らかな氷上は敵の汚い血で染まっていた。

金日成主席は、前線西部の朝鮮人民軍第1軍団は敵を強く牽制し、左翼の隣接部隊をまず反攻撃へ移行させて敵の主力集団を包囲・掃滅する一方、迅速に前方地帯に進出して敵の退路を遮断し、右翼の部隊が敵の集団を攻撃して清川江畔で包囲・掃滅するよう命令した。

この命令に従って第1軍団は、一部の区分隊を迅速に敵の背後に送り込み、敵の集結場と指揮所を襲撃して混乱に陥れ、主力部隊の攻撃に有利な条件を確保した。

雲山地域で反攻撃を開始した人民軍連合部隊は、抵抗する米第25歩兵師団を正面と左右から強力に攻撃し、泰川地域で攻撃を開始した第46歩兵師団の主力は人民軍隣接部隊との緊密な協力の下、頑強な牽制行動で米第1軍団主力の攻撃を挫折させ、11月27日には英第27旅団を一挙に壊滅し、定州を解放した。

一方、球場―寧遠界線で反攻撃の準備を整えていた人民軍連合部隊は、11月26日、清川江両岸に沿って熙川へ侵攻してくる米第2歩兵師団に致命的な損失を与え、引き続き攻撃の成果を拡大した。

前線西部の主力部隊の反攻撃に先だって、新たに敵中に入りつつあった第5軍団管下の近衛第6歩兵師団は、南朝鮮かいらい第2軍団の背後を攻撃して、主力部隊の行動を成功裏に保障した。

当時、寧遠一帯にはかいらい第2軍団第8歩兵師団が集中配置され、この一帯の有利な山岳地帯で各種の砲兵火力の支援の下、人民軍の攻撃を防ぐために必死になっていた。

寧遠一帯の敵を掃滅してこそ、今後、攻撃の成果を拡大できると考えた人民軍部隊は、三面から寧遠を包囲して敵を掃滅した。

人民軍連合部隊は、激しい反攻撃でわずか数日の間に米第24、第25歩兵師団とかいらい第1歩兵師団を攻撃して价川地域に圧縮した。清川江畔での包囲網が形成されると、敵は五六月のオタマジャクシのように清川江畔に追い詰められた。

金日成主席の作戦構想に従って、球場―价川方向へ戦果を拡大していた人民軍連合部隊は、价川地域で米第2歩兵師団の主力に対する一大包囲せん滅戦を繰り広げた。

米第2歩兵師団は人民軍の強力な砲兵火力と手榴弾、銃弾の洗礼に満身創痍になった。清川江が流れる价川一帯の谷間には、米軍の屍骸が一面に覆われ、破壊された敵の戦車と大

砲、トラックなどがあちこちに転がっていた。

精鋭部隊と豪語していた米2歩兵師団はこの戦闘で基本兵力が壊滅し、辛うじて一命を取り留めた師団長カイザーは、肝を抜かして部下たちに「それぞれ能力の限りここを脱出せよ」と指示し、三十六計逃げるに如かずと自分が真っ先に逃走した。

自軍の主力が至るところで壊滅すると、第8軍司令官ウォーカーは米第2歩兵師団とかいらい第2軍団の退却を支援するために、急遽後方の第2梯隊である米第1騎兵師団とトルコ旅団を前線に投入した。

洛東江界線で莫大な損失を被った米第1騎兵師団は、辛うじて兵力と装備を補充した状態で、ウォーカーの「命令」に従って雲山方向へ侵攻してきた。

師団長のゲイが師団の第8騎兵連隊とかいらい第15連隊を先頭に雲山の南部にたどり着いた時、後をついていた第7騎兵連隊は九龍江を渡る途中に人民軍部隊の不意の奇襲に遭い、多数の死者を出した。かてて加えて今回は、米第8騎兵連隊とかいらい第15連隊が人民軍部隊の完全包囲網に入った。

ゲイは、自分の生命が危険な状態に陥ったことに気づくと、師団参謀長ホームズに「軍団司令部に急に呼ばれている」と嘘をつき、尻に帆をかけた。

一方、1950年10月頃に朝鮮戦線に投入されたトルコ旅団の約5000人の雇用兵は、价川から徳川方向へと攻撃してきた。

軍隅里一帯の有利な山道に待ち伏せていた人民軍連合部隊は、トルコ雇用兵に激しい砲撃と銃撃を浴びせた。

手榴弾の炸裂音、機関銃の連射音、迫撃砲弾の爆発音……。

軍隅里の谷間は火炎に包まれ、銃弾や砲弾の音に騒然となった。

トルコ旅団の崩壊がどんなに惨めなものだったか、資本主義国の出版物までも「……戦闘は凄惨だった。5000人のトルコ旅団は翌日の29日朝、2個中隊ほどの戦力に減った」と書いている。

これについて南朝鮮の出版物も「1950年11月27日、清川江と大同江上流、狼林山脈は共産軍に包囲掃滅された国連軍と国防軍の屍骸で『死山血河』に変わり、野と山、谷間、至る所に高価な米国製の近代兵器が乱雑に散らばった。その日、支離滅裂になったわが敗残兵たちは、退路を開けられず、吹雪の吹きすさぶ狼林山脈と妙香山脈の谷間で酷寒と飢餓に苦しみ、彷徨し、仕方なく次々と共産軍への投降を余儀なくされた」と書いている。

米第1騎兵師団は兵員の65%とそれに相当する装備を失い、第2歩兵師団第9連隊と第23連隊、第25歩兵師団第24連隊とトルコ旅団はほぼ全滅させられた。

人民軍の地上部隊が清川江一帯で敵の主力集団を包囲・掃滅している時、人民軍飛行隊は新義州、江界、安州、平壌上空で傲慢に襲いかかる敵の飛行隊と激しい空中戦を繰り広げて米空軍に甚大な打撃を与え、敵の飛行場、軍需倉庫、軍用列車などを次々と爆撃した。

このように反攻撃に移行した前線の主打撃方向の人民軍連合部隊は、わずか3～4日の間に、米第8軍管下の第1、第9軍団、かいらい第2軍団、トルコ旅団を清川江と大同江上流地域で大量に包囲・掃滅し、前線西部の敵の主力集団を全面的な崩壊状態に陥れた。

自軍の敗北に極度に狼狽したマッカーサーは、11月27日「われわれは全く新しい戦争に直面した」「新しい局面はわれわれの希望を粉々にしてしまった」という声明を出し、トルーマンに退却の承認と7万人余りの増援を求める電文を送った。

翌日、ウォーカーとアルモンドらを東京に呼び、全滅の危機に瀕した米第8軍を救出する対策を討議したが、これ以上何の収拾策も講じられないと自認したマッカーサーは、「総攻勢」

の惨敗を認め、平壌—元山界線に退却するよう指示した。

人民軍の総反攻撃戦の序幕となる清川江界線での米第8軍の主力集団に対する包囲せん滅戦はこのように終結されていた。

数的、技術的優位を誇り、勢いよく共和国北半部へ侵攻してきた米軍を清川江畔で痛快に掃滅した前線西部の人民軍連合部隊は、意気揚々と敵の敗残兵を追撃し、清川江を渡って1950年12月初め、安州を解放した勢いで文徳、粛川一帯に進出した。

清川江界線で捕虜になった敵軍

犬死したウォーカー

1950年12月13日、京畿道漣川郡全谷里の一本道では、人民軍が埋設した地雷にかかって米第8軍司令官である陸軍中将ウィルトン・ウォーカーが犬死した痛快な場面が繰り広げられた。

ウォーカーは米軍の兵士にこのような命令を下した。

「……たとえ諸君の前にいるのが子供や老人であっても、諸君の手が絶対に震えてはいけない。殺せ！そうすることによって、諸君は自らを破滅から救い出し、また国連軍兵士の責任を果たさなければならない」

この殺人命令によって、去る祖国解放戦争の戦略的な一時後退の時期、共和国北半部の被占領地域では獣さえ顔を赤らめるような大量虐殺がはばかりなく行われ、朝鮮の山河は無辜の人民の血に染まった。

その殺人鬼が、人民軍の若い小隊長をはじめ6人の人民軍勇士によって犬死したのである。

ウォーカーの死は、憎らしい殺人鬼が朝鮮人民軍の勇敢な戦闘員によって、米軍の軍籍だけでなく、人の皮をかぶった

野獣の名簿からも適時に削除された快挙だった。

一本道に待ち伏せていた人民軍第2戦線部隊の工兵によって、ウォーカーがクリスマスを前にして即死したのは、決して偶然なことではなかった。

敵中で大規模な破壊戦を展開するという金日成主席の独創的な指針と、それを巧みに活用した人民軍第2戦線部隊の工兵たちの地雷戦による結果だった。

金日成主席は、前線西部の米第8軍が清川江畔での大包囲戦によって満身創痍になり、慌てて敗走しはじめた1950年11月30日、総参謀長を最高司令部に呼び、第2戦線部隊が敵中で大規模な襲撃破壊戦を展開するよう命令を下した。

この日主席は、人民軍の総反攻撃が開始され、敵が全般的に退却しはじめた時に、敵の有り得る企図を見抜き、それに対応してより多くの敵の兵員と火力機材を破壊できる新しい戦法である敵中破壊戦法を提示したのだった。

敵は当時、どんなことがあっても人民軍の攻撃を阻止しようと最後のあがきをしながら、38度線界線を中心に多くの兵員と戦闘機材を集結していた。

それゆえ、漣川を攻撃して敵が38度線一帯に防御線を構築できないようにしてこそ、前線西部の人民軍連合部隊が反攻

撃の成果を拡大して一撃の下に共和国北半部を完全に解放することができた。

まさにこの重大な任務を成功裏に遂行するためには、漣川を攻撃するとともに強力な敵背破壊戦を繰り広げなければならなかった。

金日成主席は総参謀長に、敵の背後で大破壊戦を展開するためには、今、敵中闘争を行っている軍団の工兵だけでは足りないかもしれないから、最高司令部直属の第１工兵旅団が破壊組を組んで敵背後の第2、第5軍団管下の各師団に派遣すべきだと語った。

そして、翌日まで最高司令部直属の第1工兵旅団から戦闘経験のある健康な軍人で構成された11の敵中破壊組を組むべきだ、工兵局長に指示して工兵破壊組のメンバーに必要な武器や戦闘技術機材を携帯させ、彼らに遂行すべき任務を具体的に与えた後、戦闘準備状況を点検して派遣しなければならないと指摘した。

また、敵中で活動している第2戦線部隊が破壊組を受け入れて破壊戦を大掛かりに行い、破壊戦が終われば破壊組を第2軍団と第5軍団に工兵技術者として配置し、彼らが管下の各師団で工兵を養成することについても教えた。

金日成主席は、翌日の12月1日にも総参謀長と作戦局長を再び呼び、総参謀部が12月25日のクリスマスを契機に、敵背で大規模な破壊戦を展開するようにした。

主席の作戦的方針に従って人民軍の第2戦線部隊は、工兵の講習と訓練を集中的に行った上で、敵背での大規模な破壊戦によって敵を戦慄させた。

まさにこのような状況の中で、朝鮮人民軍第2軍団管下の第9歩兵師団の工兵連隊が漣川一帯での地雷戦でもって、約80人の参謀陣を率いて漣川に入った米第8軍司令官ウォーカーをはじめとする敵を掃滅する戦果を上げたのだった。

当時、敵は前線西部での38度線中間防御を何としても実現させようと、38度線西部に居座り、ソウルから遠くない漣川を中心に武力を大量に集結していた。

敵は、人民軍の敵中闘争部隊が臨津江界線での伏兵戦のためにその付近に兵力を集中したので、他の地域は空けておいたであろうと誤算し、漣川を確保しようとして機甲部隊の支援を受ける1個連隊を漣川に進駐させ、それでも安心がならず新しい予備隊をこの地域に増派して中間防御を図っていた。

漣川解放戦闘は、 年末までに共和国北半部の境内で敵を残らず掃滅せよとの金日成主席の命令に従い、多量の弾薬と砲

弾を奪取して第2戦線部隊の戦闘力を強化できるようにするきわめて重要な意義を持つ戦いだった。

第9歩兵師団とその所属の第87歩兵連隊（1950年10月から機動第1連隊に改称）は、中間防御を企む敵の企図を挫くためにひそかに漣川を包囲し、12月13日未明に攻撃を開始した。

一方、敵の最も重要な退路と予想される漣川―ソウル間の道路には、歩兵と共に工兵地雷埋設組が派遣された。

一時的な「戦果」を上げ、清川江界線に至るまで威勢を張っていたウォーカーは敗戦に直面した雇用兵に「勇気」を吹き込むために、当時ソウルを離れて漣川に出ていた。

ウォーカーは、北から退却して漣川周辺に駐屯していた米第24歩兵師団と英第29旅団を視察して雇用兵の「士気」を鼓吹し、ついでに歩兵師団で作戦参謀を務める息子に直接勲章を授与するという日程まで立てて、漣川に来たのだった。

ウォーカーが漣川地区に到着したのは、人民軍第2戦線部隊の第9歩兵師団がこの地区の包囲網を狭めていた時だった。

漣川―ソウル間の退路遮断任務を受けた第9歩兵師団直属の工兵大隊の崔鐘雲小隊長が率いる爆破組が漣川郡全谷里に到着したのは深夜だった。

全谷里には漣川からソウルに通じる一本道があるので、

もし敵が逃げようとするなら、抜け出るルートはここしかなかった。

敵の将校に成りすました崔鐘雲は敵情を把握した後、すぐ地雷の埋設に着手した。爆破組員たちは道路にできたトラックの車輪の軌跡をそのまま残し、その横に穴をあけて地雷を埋めた。

第9歩兵師団が漣川に包囲された敵への攻撃を始めると、漣川市街は蜂の巣をつついたように騒然となった。敵はろくに抵抗もできず、約1400人の屍骸を残したまま、それぞれ命拾いをしようと、ソウルの方に向かって急いで逃げはじめた。

人民軍の攻撃に魂が抜けたウォーカーは、補佐官と共に自分が直接車を運転し、銃声が少ない場所を捜して逃げる途中、地雷を埋設したところに入った。

防弾や転覆防止装置まで備わったウォーカーの装甲乗用車は、先頭の戦車、もう一台の装甲乗用車と共に地雷埋設区域に入った。

瞬間、轟々たる地雷の爆音が全谷里の谷間を揺るがし、炎に包まれた敵の戦車が道路を遮り、防弾乗用車は前後で爆発する地雷によって転覆した。

崔鐘雲は「一人も逃すな！敵に死を！」と叫びながら敵に

向かって突進した。

突撃する戦闘員たちの命中弾に半殺しになった敵は、まともな抵抗もできず、ばたばたと倒れた。

戦場を見回っていた戦闘員たちは驚いた。防弾車のそばに米軍の将官が倒れていたが、それはほかならぬウォーカーだった。

死体となったウォーカーの周辺には、彼が所持していた勲章とその証書が散らかっていた。

朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議常任委員会は1951年1月22日、米8軍司令官ウォーカーをはじめとする敵兵約80人を殺傷または捕虜にし、漢灘川の橋を爆破して敵の増援企図を破綻させた朝鮮人民軍第2軍団管下第9歩兵師団の工兵大隊小隊長崔鐘雲の偉勲を高く評価し、共和国英雄称号を授与した。

しかし、このような歴史的事実にもかかわらず、敵の出版物はウォーカーの死についてこう書いている。

「厳しい状況の正念場で国連軍は、有能な指揮官の一人を失った。12月13日、第8軍司令官ウォーカー中将が……感謝状の授与式に向かう途中、彼の乗った車が韓国軍トラックと衝突して殉職したのである……。

大将への昇進の手続が行われていたが、彼はそれも知らず、60歳で生涯の幕を閉じたのである」

思いがけなく殺人首魁を失った敵は恐怖におののき、人民軍戦闘員たちは意気衝天した。

米軍はウォーカーが犬死すると、朝鮮の山も小道も恐れ、自分らの戦車や装甲車も信頼せず、厭戦思想と恐怖心にとらわれた。敵にとって朝鮮の地はどこも無事にいられるところではなかった。行く先々での予期せぬ襲撃と地雷畑は、クリスマス前夜に朝鮮の勇士たちが「アメリカ帝国」に送る特異な「贈物」として敵を待っていたのである。

全谷里で犬死した米8軍司令官のウォーカーと破壊された運輸機材

「寸土をも敵の手に渡すな！」

祖国解放戦争の開始から１年が過ぎた。

朝鮮人民軍の強力な攻撃に満身創痍になった米軍は、1951年6月に至って戦争の火ぶたを切ったその位置である38度線界線で動きがとれなくなってしまった。

朝鮮戦争の早期の「終結」を狙っていた自分らの企みが挫かれると、米国支配層の内部ではその責任を転嫁するための泥仕合が演じられていた。

マッカーサーは戦争失敗の責任がトルーマンにあると非難し、トルーマン連中はマッカーサーに朝鮮で犯した「厳重な軍事的錯誤」を検討するよう強要した。

このような泥仕合の末、「東方のナポレオン」と自称していたマッカーサーが敗戦の責任を取り罷免された。

当時の米国務長官マーシャルは「神話は崩れた。われわれは他人が考えていたように、それほど強力な国ではなかった」と悲鳴を上げた。

そればかりではなかった。米国は朝鮮侵略に反対する全世

界の人民と自国内の人民の強い抗議と糾弾にさらされた。

戦争の1年間に莫大な人的・物的損失を被った米国は、朝鮮侵略の目的を達成するための新しい活路を求めはじめた。

米国は地上戦での突破と東・西海両岸での上陸作戦を企図し、戦争は長期的な性格を帯びるようになった。

金日成主席は、このような軍事・政治情勢に対処して敵の一切の攻撃企図を粉砕し、敵にせん滅的な打撃を与え、戦争の最後の勝利を獲得するための新しい戦略的方針を提示した。

金日成主席が提示した戦争第4段階の戦略的方針は、積極的な陣地防衛戦を展開してすでに占めた界線を堅持し、敵を絶えず攻撃・掃滅する一方、時間を獲得して人民軍の戦闘力をいっそう強化し、後方を強固にすることによって、戦争の最終的勝利のための全ての条件を整えることだった。

戦争第4段階の戦略的方針に従って、人民軍は1951年6月中旬から積極的な陣地防衛戦に移行した。

金日成主席は、積極的な陣地防衛戦を行うために、すでに占めている界線に頑丈な坑道をつくって難攻不落の要塞にし、それに依拠して軍事活動を展開するようにした。

1951年7月14日、主席は朝鮮人民軍最高司令部の軍事副司令

官に、すでにわれわれが提示した戦争第4段階の戦略的方針に従って積極的な陣地防衛戦を展開し、わが軍の兵員と戦闘技術機材を温存しながら敵を絶えず攻撃・掃滅すべきだ、全ての前線部隊がすでに占めている界線で積極的な陣地防衛戦を展開できるように坑道陣地と塹壕、交通豪、トーチカをさらに堅固に構築すべきだ、と指示した。

その後、軍人たちが働いている坑道工事現場を訪れた主席は、原子爆弾が落ちても崩れないように坑道を掘らなければならない、そのために岩質が悪いところには丸木の支柱の代わりに鉄筋コンクリートを使うべきだ、入り口には防弾壁を作り、坑道の中には屈曲部や避難所を作らなければならない、と言った。

人民軍将兵は、困難な状況の下でもすでに占めている界線に堅固な坑道陣地を造るための火花散る戦闘を展開した。そうして、短期間に前線と東西海岸に坑道を基幹とする堅固な防御体系が完成し、陣地は要塞化された。

坑道化された人民軍部隊の陣地に砲兵火力が増強された。

山がほぼ80％を占める朝鮮の地形を考慮に入れて曲射砲火力が大々的に増強されたばかりでなく、直射砲も前線の高地に引き上げて前方の高地の上にある敵のトーチカと戦車を直

ちに掃滅するようにした。また海岸砲陣地では機動砲兵中隊を組織して敵艦との闘争を強化するようにした。

こうして、1951年7月～8月に前線の砲兵火力は迫撃砲を除いても以前の2倍以上に増強された。すると敵は、前線は共産軍の砲撃によって火花が散ったと悲鳴を上げた。

金日成主席の創造した陣地坑道化は、以前の陣地体系とは全く異なる、新しくて独特なものだった。

以前の要塞は反攻撃や対空防御の面で弱点があり、防御陣地の奥行きが深くないので、爆撃や戦車、大砲の集中火力に耐えられず破壊されるのが常だった。

しかし、野戦陣地と組み合わされた人民軍の坑道は、砲

坑道陣地を掘る朝鮮人民軍戦闘員たち

兵火力と航空打撃力がかつてなく強まり、核兵器などの大量殺りく兵器まで動員される現代戦でも兵員と戦闘技術機材を温存し、強力な攻撃で敵を制圧・掃討できる威力ある拠点だった。

1951年12月27日、米第8軍司令官バンフリートは米極東軍司令官リッジウェーに、「北朝鮮軍の陣地は坑道で非常に固められていて、普通の攻撃準備射撃をもってしては効力がなく、いかなる攻勢も多くの犠牲を出すであろう。もし戦って利益を得るとしても、それは戦闘でこうむる犠牲に比べるとあまりにも少ないものである」と言った。

米国は1951年6月30日、ついに朝鮮側に正式に停戦会談を要請せざるをえなくなった。

そうして1951年7月10日から停戦会談が開始された。

しかし、米国は停戦会談の幕裏で新しい軍事的冒険を企み、前線西部と東部に大量の兵力を集結させた。

「栄誉ある停戦」を夢見ていた米国は、あたかも前線西部で大攻勢をかけるかのように見せかけて、ひそかに前線東部に莫大な兵力を投入し、東海岸の元山、通川地域への上陸作戦を準備した。

前線を視察したリッジウェーは「会談期間中に前線を強化

命中砲火を浴びせる朝鮮人民軍戦闘員たち

し、部隊の兵員損失を補い、広範な攻撃を展開する時に必要な兵器、弾薬を第１線部隊の管轄下におくこと」を命令し、米第8軍司令官バンフリートもこれに調子を合わせて「停戦会談での合意は『国連軍』が軍事的に勝利することによってのみ可能である」と言い、兵力と戦闘技術機材を大々的に前線に投入した。

停戦会談の初日会議が行われた翌日の1951年7月11日。

金日成主席は、乾芝里に位置している最高司令部指揮所に軍事副司令官の崔庸健を呼んだ。

主席は彼に、最近の前線での敵の動きから考えられることはないかと尋ねた。崔庸健は米国が軍事的攻勢を企んでいるようだと答えた。

主席は、最近の前線と後方での敵の動きを分析してみると、彼らが新しい攻勢を企んでいるのは明らかである、停戦会談でわが方の原則的かつ断固たる立場に直面して、自分らの強盗さながらの要求を実現することができなくなった敵は、軍事的圧力に執着し、それはすなわち新しい攻勢になるだろうと言い、敵が新しい攻勢で狙う目的は何であるか思い当たるところはないかと尋ねた。

崔庸健は、敵が前線を押し上げようと企んでいるのでは、と答えた。

主席は、それも彼らの主な目的の一つだろう、敵は地上での攻撃と組み合わせて海上からの上陸を行って、前線の重要な戦略的拠点を占領したうえで前線を押し上げ、それによって「栄誉ある停戦」を実現しようとするだろう、これがまさに敵が新しい攻勢で狙う目的である、と語った。

しばらく考え込んでいた主席は、敵の攻勢を粉砕するためには、敵の主攻撃方向を正確に判断し、人民軍の主要防御方向を設定すべきであり、そこに兵員と機材を集中すべきだと

指摘した。そして敵の主攻撃方向について考えられることはないかと再度尋ねた。

しばらく考えていた崔庸健は、明確な判断はつかないが、もしや敵が前線西部を狙っているのではないかという所見を述べた。

彼はその論拠として、戦争の第1、第2段階でも敵が主攻撃方向を前線西部に向けていたこと、この方向は前線東部と中部の山岳地帯に比べて機動路が発達しており、米軍が山岳戦に慣れていないばかりでなく、山缶戦を非常に恐れており、彼らの兵器と戦闘技術機材が山岳地帯ではその利用に制限があって大きな効力を発揮できないこと、そして西部地帯が穀物の主要な生産地帯であること、現在、前線西部に敵の大兵力が集結していることなどを挙げた。

すると主席は、そう推察するのも無理ではない、敵は今まで主攻撃方向を主として前線西部に定めていた、前線西部は兵器と戦闘技術機材を意のままに機動させることができるが、前線東部はそうでない、だからといって敵が今回の攻勢でも主攻撃方向を前線西部に設定するだろうか、いや、敵は今回の攻勢では前線西部ではなく、前線東部を狙っている、敵は元山、通川一帯に海兵隊を上陸させて地上部隊の攻撃と

組み合わせて前線東部と中部の戦略的に重要な意義を持つ山岳地帯を掌握することを企てている、と指摘した。

崔庸健は驚きを隠せず、敵が前線西部に部隊を機動させ、砲兵を防御線近くに配置し、西海の海上に艦船を展開してわれわれの海岸地域に艦砲射撃をしている現実をどう見るべきかと尋ねた。

主席は、それは敵の浅知恵にすぎない、狡猾で陰険な米国はわれわれに主攻撃方向を錯覚させて、われわれが戦線西部に兵力を増強するようにした後、前線東部に基本兵力を投入しようとしている、敵は前線東部でも1211高地を主な攻撃対象に設定しようとするだろう、と言い、その理由を説明した。

そして、敵の今後の動静を注視する必要があるが、今までの敵情を総合してみると、このような結論が得られると確信を持って言った。これは、敵の総体的企図と敵軍集団の配置と行動性格、前線東部の地理的特徴とそれが軍事行動に与える影響などに対する科学的な分析に基づいていた。

この時期に至って、敵もそれなりに人民軍に対する一定の把握をしていた。自軍に比べて火力手段と機動機材、特に艦船と飛行機が絶対的に足りないことをよく知っている敵は、制空権と強力な火力、発達した機動手段の優位性を利用して

仁川上陸作戦の「成果」を生かし、依然として東海岸への上陸作戦企図を捨てずにいた。

敵はここでも、干満の差が大きい朝鮮西海より元山、通川地域を合理的な上陸地点と見ていた。

だが、問題は前線東部の山岳地帯だった。敵は前線東部の山岳地帯を制圧せずには、元山、通川地域への上陸作戦が不可能であることをよく知っていた。特に1211高地は重要な軍事戦略的拠点だった。

前線東部の楊口—直洞嶺の間、麟蹄—伊布里の間に位置している1211高地は、大宇山、カチル峰、鷹峰などを連結し、奥深くに伸びた道路を支配する戦略的、作戦的にきわめて重要な高地だった。

実際に、7月初めにも米第10軍団と南朝鮮かいらい第1軍団は楊口界線から1211高地の前方にある大宇山（1178メートル）への攻撃に出た。このような敵の企図は、新しい「攻勢」における主攻撃方向が前線東部であることを示唆する根拠となった。

特に、米軍は一歩一歩前進するという「歩歩占領戦術家」として知られたリッジウェーの作戦と気質が露見した状況の下で、人民軍がそれに対処できると思い、今度は「歩歩

占領」とは異なる前線東部への突発的な攻撃を図った。敵は人民軍の視線が前線西部や中部に向けられており、山岳防御が不利な上、前線東部への人民軍の補給路が限られているため、自分たちの不意の「攻撃」が成功する「可能性」があると考えた。

明波里から東海岸に沿って元山に至るまで、山地が激しい斜面をなしており、稜線が海岸まで連なり、内陸部に伸びる道路のある前線東部は地理的に見ても、敵の上陸にもう一つの可能性を与えるものだった。これらの点は、敵が主攻撃方向を前線東部にした理由となった。

金日成主席は、敵の動きを鋭く注視しながら今後敵の新しい攻勢を粉砕するための準備をしっかりと行うべきだと語った。

7月下旬に行われた最高司令部作戦会議で、金日成主席は、再び米国の冒険的な「夏期攻勢」の目的を暴き、それを一撃の下に粉砕する方略を打ち出した。

1951年8月18日、米軍の冒険的な「夏期攻勢」の幕が上がった。

敵の攻撃は砲撃と空爆から始まった。突然、無数の閃光が空にひらめき、凄まじい爆音が山岳と谷間を揺るがす数千数万発の砲弾が人民軍の防御陣地に飛んできて炸裂した。

これとともに、敵機の大編隊が飛来して猛爆撃を始め、朝鮮東海上のおびただしい敵艦が艦砲射撃を続けた。高地はまたたく間に火の海と化した。

同時に、米第10軍団とかいらい第1軍団は、1梯隊に展開した6個師団を動員して約50キロの前線で3〜4時間、砲撃と爆撃を加えた後、主攻撃方向を1211高地—直洞嶺—金剛方向に定めて攻撃を開始した。

敵は、人民軍陣地を突破する目的で数万発の爆弾と砲弾を浴びせた後、戦車の掩護のもとに防御線の重要高地に攻撃を集中させた。

米第8軍司令官バンフリートは「夏期攻勢」の序幕が上がったその時刻、記者団の前に現れ、「今回の攻勢は最上の準備のもとに勝利を見越して繰り広げるものである。兵士たちは十分な飛行隊と砲、戦車の掩護の下にアメリカ合衆国の栄誉を輝かせるために前進し、勝利するであろう」と公言した。

そうして、前線東部の1211高地を中心とする山岳地帯で朝鮮人民軍連合部隊の英雄的な夏期防衛作戦が始まった。

金日成主席は1951年8月8日、戦線司令部の指揮メンバーに、一歩も退却してはいけない、もしやむをえず一時的に退却した場合、その翌日には必ず取り戻さなければならないと

いう親書を送った。

1951年8月20日、金日成主席は最高司令部指揮所の執務室で第2軍団長の崔賢に会った。

到着の報告をする軍団長の手を優しくとった主席は、労をねぎらい、体は丈夫なのか、戦闘員たちもみんな健康なのかと尋ねた。

みんな健康であるという崔賢の答えを聞いた主席は、作戦地図の1211高地を指し、敵は現在1211高地を狙ってこの地域に大々的に兵力を集中している、それは敵が1211高地を突破せずには、自軍の地上部隊が東海岸の上陸部隊と協力できないことを知っているからだ、われわれは1211高地で敵の主力を決定的に撃滅し、1211高地を守らなければならない、1211高地を守るのは容易なことではないが、日本帝国主義と戦った抗日武装闘争期に比べれば条件が有利である、われわれには近代的兵器で装備した部隊と強固な後方があり、戦闘員の士気も高い、私は人民軍の軍人たちが1211高地を必ず死守するものと信じている、と語った。

崔賢は自信に溢れ、どんなことがあっても1211高地を死守すると誓いを立てた。

人民軍勇士たちは抗日革命闘士が発揮した百折不撓の革命

精神に見習い、大水で輸送路が絶たれると、谷間に空中ケーブルを設置して弾薬と食糧を運びながら敵の狂気じみた攻撃を撃退した。

彼らは弾薬と手榴弾、砲弾を無駄にせず敵兵を撃ち倒し、弾薬と手榴弾が切れれば敵の死体からかき集めて敵を撃退し、それさえなければ岩を転がし、白兵戦を繰り広げながら波のように押し寄せる敵を掃滅した。

毎日数万発の砲弾が炸裂し、岩が砕けて粉になる燃えるような高地でも、人民軍の勇士たちは不死身の人間のように戦った。

敵は1211高地方向への突破を狙い、戦術的に重要な556高地、983.1高地、1059.4高地に一日にも10回以上の攻撃を強行してきた。

人民軍戦闘員たちは円形防御陣を敷き、敵の無差別な爆撃と砲撃によって壊れた防御施設を即座に補修し、その時々の状況に沿って、火力と機動を巧みに組み合わせて攻撃してくる敵をせん滅し、防御線の重要高地を決死の覚悟で守り抜いた。

彼らの英雄的な闘争は1211高地の前方にある983.1高地で最も激しく行われた。

敵は、かいらい第7歩兵師団を弾除けに駆り出し、約200門の砲を攻撃正面の3キロ区間に展開し、9日間にわたって計36万発余の支援射撃を強行した。

戦闘期間、1門の砲が15～20メートル区間の攻撃正面に1860発の固定射撃を行ったその火力密度は、当時までの戦争史に類のないもので、敵はこれを「バンフリート弾薬量」と誇った。

しかし、敵は人民軍勇士たちが守っている高地を占領することはできなかった。

556高地と983.1高地を守っている安東第12歩兵師団は、8月18日だけでもかいらい第7歩兵師団と米第2歩兵師団主力の17回にわたる攻撃を撃退し、高地を頑強に守り抜いた。

983.1高地を守る戦闘で第30歩兵連隊第1大隊は、3日間に20余回にわたる敵の攻撃を撃退し、敵に甚大な打撃を与えた。特に大隊の第1中隊第1小隊は4人の戦闘員が残るまで決死の覚悟で戦って高地を守り抜いた。

戦闘は日増しに激しくなり、高地の中腹と谷間は敵の死体に覆われ、敵の恐怖は極度に達した。

当時、前線に出ていた米国の一記者は、自軍の死体に覆われた983.1高地の中腹を見て「血に染まった峰」と表現し、西

側世界の評論家たちは「『輝かしい戦果を上げて自信を持たせる』というバンフリートの試みは失敗した」と評した。

965高地、1030.9高地など、重要な支配的高地を占めた人民軍第2歩兵師団の戦闘員たちは強力な火力と反撃によって、数多くの飛行隊と砲兵火力の掩護の下に強行される敵の攻撃を退け、高地を死守した。

この時期、前線の状況を深く洞察した金日成主席は、積極的な陣地防衛戦と組み合わせて至るところで襲撃組、飛行機狩り組、戦車狩り組、狙撃兵組運動を活発に展開し、前線で主導権を握るという方針を提示した。

これらの戦法は、金日成主席が抗日武装闘争時期に創造した戦法を近代戦の要求に即して発展させ豊富にした戦法であり、防御線での敵の動きを拘束するばかりでなく、敵背深くにある敵の兵員と戦闘技術機材を掃滅して、敵の作戦を破綻させる積極的な戦法だった。

これらの多様な戦法の中で、襲撃戦、特に夜間奇襲戦は防御の積極性をいっそう高めて前線での主導権を強固にすることを可能にし、敵の「技術的優位」を戦術的優位を持って打ち破ることを可能にする威力ある戦法だった。

それまでの襲撃組の経験を生かしつつ、人民軍部隊は襲撃

組の活動を小さい範囲からより大きい範囲に、一部の地域での個々の対象に対する襲撃からより広い地域における複数の対象に対する同時的な襲撃戦に発展させていった。

襲撃組活動は、特に1211高地防衛者の間でより積極的に行われた。

1951年10月5日夜、1211高地を防衛している第2軍団長崔賢に電話をかけた金日成主席は、敵情偵察を強化するよう指示しながら、われわれは今、積極的な陣地防衛戦を展開している、敵が攻撃してくることを待つのではなく敵背に襲撃組

1211高地の防衛者たち

を送り続けて、敵の指揮所と通信連結所、戦車集結場と砲陣地、兵器保管庫と給養倉庫を襲撃すべきだ、と語った。

金日成主席はすでに1951年9月23日、知恵山に登り、1211高地防衛戦に関する指針を示す時も、軍団長に陣地防衛戦を強化するということは決して襲撃組活動を排除するものではない、頑強な陣地防衛戦を繰り広げると同時に、必要な時には大胆かつ不意の襲撃活動を積極的に展開しなければならないと述べた。

そして、人民軍部隊は襲撃組活動を強化することによって、敵を至るところで痛撃して敵の兵員と各種の対象物、戦闘技術機材を不断に掃滅すべきだと強調した。

第2軍団内の第2歩兵師団、第13歩兵師団、第27歩兵師団と軍団直属の工兵大隊、偵察大隊は、20余の強力な襲撃組を組織して敵軍の指揮所と戦車集結場、砲陣地などを次々と襲撃する

ようにした。

第2歩兵師団は10月11日から15日までの間に38の襲撃組をカチル峰、1181高地一帯に派遣して敵に甚大な打撃を与え、敵を恐怖におののかせた。10月17日から26日までの間に、また31の襲撃組をカチル峰、1181高地、西喜嶺一帯に派遣して攻撃出発陣地を占めていたり背後から進出する敵の兵員と砲陣地を襲撃した。

第13歩兵師団も10の襲撃組を鳥項谷、鳩峠一帯に送り込み、攻撃出発陣地を占めている敵を奇襲・掃滅することで敵の攻撃企図を破綻させた。

1951年10月末、敵が1211高地とカチル峰の間に位置した東南側の無名高地を占めた以降、人民軍の戦闘員たちは敵の集中火力にさらされた。それだけに、敵の手中から東南側の無名高地を奪還するのは時間を争う緊急の戦闘課題となった。軍団参謀部は、無名高地の敵を襲撃して基本兵力を掃滅した後、主力を送って高地を堅持する作戦を練った。

1951年11月4日夜、11人の人民軍襲撃組は廉泰敬分隊長に引率されて無名高地へ出発した。

彼らは、無名高地に上ってくる敵の炊事兵を捕らえて通行暗号をつかんだ。小道に沿って高地に上った彼らは、敵の歩

襲撃組活動

哨を生け捕りにし、夜が明けると1211高地を攻撃する目的で無名高地の兵力がさらに増強されたことと、敵の兵舎、テント、トーチカなどの位置をことごとく探り出した。

即時に襲撃組を三つのグループに分けた廉泰敬は, 対戦車手榴弾でまず敵のトーチカを破壊した。これを合図に人民軍の砲撃が無名高地の裏手にある敵の陣地に続けざまに浴びせられた。

一襲撃組員は敵のテントの中に手榴弾を相次いで投げ込んだ。高地は大混乱に陥った。

人民軍が高地を占領したと勘違いした敵は高地に砲弾を発射しはじめた。しかし、敵の退路を遮断するために高地の後面に待ち伏せていた襲撃組は何の被害も受けず、むしろ敵は自軍の砲弾にほとんど壊滅した。

廉泰敬は1211高地上空に信号銃を発射した。これを受けて無名高地の防御任務を与えられた人民軍の歩兵区分隊が到着して高地を占領した。

襲撃戦は20分足らずで終わった。高地には敵の死体が一面を覆い、重機、軽機、60ミリ迫撃砲など戦利品は山のように積まれた。

第2軍団襲撃組の強力な先制攻撃によって、敵は多数の兵員

と戦闘技術機材を失い、西喜嶺、沙汰里方向への突破企図を完全に放棄した。

敵は自軍の状況をこのように慨嘆した。

「相手側の兵士たちは頻繁に前線をくぐり抜けてきて、長くて真っ直ぐな塹壕に自動武器の乱射をしたりした。この時期にきて、防御に対する相手側と国連軍との違いは、ホテルの主人と一夜の宿泊客との違いのようだった……」

猛烈な襲撃組活動は、秋期防御作戦の全期間、東西両方で繰り広げられ、積極的な陣地防衛戦の勝利を保証する戦闘行動の一つとなった。

狙撃兵組活動も防御の積極性を高める上で重要な役割を果たした。狙撃兵たちは、敵味方の双方が堅固な防御陣地に依拠して対峙している状況の下で、敵を絶えず掃滅することによって、敵の個別的または集団的活動を制約した。

1951年11月2日、朝鮮人民軍最高司令官の命令第085号「狙撃兵組を組織することについて」が各人民軍部隊に下達された。

狙撃兵組活動は、死の恐怖から抜け出そうと戦々恐々している米軍の手足を縛りつけられる戦法だった。

狙撃兵組運動が始まってから、その人数は急激に増え、そ

の活動も積極化した。

特に1211高地界線では狙撃兵組運動が盛んに行われた。

高地の上から見下ろすと、敵陣が手に取れそうに近く見える1211高地で、夜が明けると目を覚ました敵が身体をあらわにし、人民軍の陣地をじろじろと眺めながらぶらついていた。

一人の敵将校が下着のまま塹壕に上がって朝の運動をしようとする時、夜明け前から寒さを凌いで潜伏していた人民軍の狙撃兵が撃った弾丸が飛んできた。

お辞儀でもするかのように腰を屈めながら、雪の中に鼻を突っ込んで倒れた将校のまわりに集まった敵兵に、人民軍の狙撃兵たちは相次ぐ射撃を加えて数人を射殺した。

これは、一人を餌にして数人の敵兵を狩る人民軍の狙撃兵たちが広く駆使してきた方法だった。

彼らは座して敵を待ったのではなく、敵を捜して前方に出て、見つけ次第射殺した。

狙撃兵組の活動が活発になると、敵は昼間の行動を慎むようになり、常に狙撃兵の命中弾が怖くて不安の中で日々を過ごした。

「夜だけが怖いのではなく、昼も死の連続である」

狙撃兵組活動

以前には「安息所」となっていた高地の背面も、全て敵の恐ろしい死地となった。

「夏期攻勢」の初期から米軍は、人民軍の防御陣地を突破しようと、最新戦車を前線に大量に配備しはじめた。そうして前線の山岳地帯はもとより、前線から後方に至る道路沿いには列を成して移動する戦車が轟音を発していた。

しかし、1951年8月24日に下達された朝鮮人民軍最高司令官の命令第0483号「戦車狩り組組織と訓練の実施について」を心に受け止め、こぞって立ち上がった各戦車狩り組は、敵中に深く入って遭遇する敵の戦車を残らず破壊した。

戦車狩り組は、敵の厳重な警戒網をくぐりぬけて敵地に深く潜入して対戦車地雷を埋設したり、伏兵・奇襲して前線に出る戦車を破壊したり、集結している戦車を不意の襲撃で爆破したりした。

すでに金日成主席は、1951年6月25日、朝鮮人民軍最高司令官の命令第00409号「戦車襲撃組活動をいっそう強化することについて」を下達した。

命令には、人民軍内の各歩兵中隊で祖国と人民に忠実で、戦闘を通じて鍛えられた兵士、下士官3～10人で戦車襲撃組を組織すること、各部隊では戦車襲撃組員に個人火器を持って敵の戦車を破壊する方法と敵の戦車の脆弱な部分を研究するための学習をさせること、地上部隊の全ての軍人に地雷埋設法や解除法の教育を行うことなど、戦車襲撃組活動を力強く展開するための貴重な指針が盛り込まれていた。

朝鮮人民軍最高司令官の命令に従い、各人民軍部隊では模範戦闘員で戦車襲撃組を組織し、大隊、連隊単位で個人火器を持って対戦車戦、対装甲戦を繰り広げて敵の戦車を掃滅するための戦法を身につけさせ、戦車襲撃組活動を猛烈に展開した。

戦車襲撃組は、防御線と敵の後方に深く入って縦横無尽

に駆け巡りながら、条件にかかわらず、敵が想像もつかない奇妙かつ絶妙な襲撃戦で、敵の戦車や装甲車を多数破壊した。戦車襲撃組の大胆な戦闘行動で、敵は不安と恐怖におののいた。

人民軍のこのような戦闘経験は、敵の戦車をはじめとする機甲部隊の狂気じみた行動を挫折、撃破する上で工兵の活動をさらに強化することが重要であることをはっきりと証明した。

まさにこのような経験に基づいて、金日成主席は積極的な陣地防衛戦の要求に即して、敵の戦車破壊戦をより高い段階でいっそう積極的に行うという最高司令官の命令第0483号を下達したのである。

その結果、人民軍の前線連合部隊と各部隊の工兵区分隊では戦車狩り組を組織し、敵中で戦車破壊戦をより積極的に展開した。前線部隊の戦車狩り組は、敵の後方に深く潜入して絶妙な地雷戦で戦車と装甲車を多数破壊した。

戦車破壊情況を検討していた敵の参謀部は、破壊された戦車の絶対多数が人民軍工兵の埋設した地雷によるものであることに驚愕し、「わが軍の戦車損失の72％は敵の地雷によるものであることを常に銘記しろ」という視覚宣伝物まで作っ

戦車狩り組運動

て配布した。

人民軍の英雄的な戦車狩り組によって、敵は戦争の3年間に3255台の戦車や装甲車を失った。

一方、1950年末に組織された人民軍の飛行機狩り組も、戦争第4段階に至って活動をより高い段階で積極化し、敵の「空中での優勢」を粉砕する上で大きな役割を果たした。

歩兵銃と大口径機関銃、重機関銃及び対戦車銃で武装した飛行機狩り組によって、全国は銃身の林を成し、数多くの敵機が撃墜された。

飛行機狩り組の強力な活動に恐れをなした米空軍は、1951

年下半期からは次第に低空飛行から高空飛行へ、昼間飛行から夜間飛行へ、単独飛行から編隊飛行へ戦術を変えざるをえなかった。

このように、積極的な陣地防衛戦と組み合わせて至るところで活発に展開された襲撃組・飛行機狩り組・戦車狩り組・

破壊された敵の戦車と
撃墜された敵機

飛行機狩り組運動

狙撃兵組運動を通じて、人民軍は「夏期及び秋期攻勢」、「金化攻勢」など敵の大攻勢を水泡に帰させた。

特に1952年に入り、人民軍部隊は米国の豪語する「技術的優位」を粉砕するために、金日成主席の創造したチュチェ戦法による積極的な軍事活動をいっそう強化した。

敵の「夏期攻勢」を撃退するための作戦期間中の1951年8月18日から23日までの防御戦だけでも、前線東部の人民軍連合部隊はあらゆる困難を克服し、英雄的防衛戦を繰り広げて敵兵1万6000人余りを殺傷または捕虜にし、8月24日には前線東部の一部の地域で敵の攻撃をいったん挫折させた。

敵は、押し寄せては崖にぶつかって飛び散る波のように一歩も前進できず、谷間には死体が山をなした。

敵が1951年9月29日から強行した冒険的な「秋期攻勢」の際にも、人民軍部隊は敵の兵員と技術機材をより多く掃滅するための軍事活動を積極化し、戦争の主導権を掌握して敵の攻撃企図を適時に粉砕した。

人民軍勇士たちの英雄的な闘争によって、人民軍は秋期防御作戦で敵兵14万7700人余りを殺傷または捕虜にし、戦車、装甲車279台、各種の砲113門、自動車114両を破壊・鹵獲し、飛行機961機を撃墜、撃破したばかりでなく、艦船60隻を撃

沈・撃破し、数多くの兵器、戦闘技術機材を破壊・鹵獲する戦果を上げた。

このように英雄的な朝鮮人民軍は、金日成主席が創造した多様なチュチェ戦法を巧みに適用することによって、陣地防衛の積極性を高め、いつも戦線の主導権を掌握して米軍に甚大な打撃を与えることができた。

完敗に終わった「模範戦闘」

朝鮮の中部鉄原の西側にあるT字型高地は、厳しい戦火の日々、米国の「強大さ」の神話を粉砕した朝鮮人民軍の英雄的な闘争精神とともに世に広く知られている。

祖国解放戦争史の一ページを飾ったT字型高地戦闘の勝利は、百戦百勝の鋼鉄の総帥である金日成主席の非凡な軍事的英知と知略、献身的な労苦を抜きにしては考えられないのである。

1953年1月末、全前線での度重なる惨敗でさんざんな目にあわされた米軍は窮地から抜け出す陰険な企図のもとに「模範戦闘」という作戦計画を立てた。

国内における反戦気運や朝鮮戦争での連続的な失敗によって窮地に陥ったトルーマン政府の苦境を巧みに利用したアイゼンハワーは、「朝鮮戦争における米国人の悲劇的な鐘の音にピリオドを打つ」と公約して大統領に当選した。

アイゼンハワーは、「栄誉ある平和」を達成するためには「積極的」な戦争拡大のための新たな「攻勢」が必要であ

る、と公然と言いふらした。

アイゼンハワーが唱えた冒険的な「新攻勢」企図を実現するための有利な条件をつくり出すために、米軍は前線で局部的な攻撃を計画した。T字型高地戦闘もそのうちの一つだった。

敵はこの戦闘を通じて彼らの「強大さ」を誇示し、追随国から多くの兵力を「新攻勢」作戦に引き入れるとともに共和国に圧力を加えることによって、1952年10月に中断された停戦会談を再開して彼らの恥知らずな要求を実現しようと妄想していた。

また、鉄原—伊川間の重要道路を制圧しているT字型高地を占領することによって、有利な攻撃の出発位置を占め、今後大規模の攻撃へ移行するための条件を整えようとした。

鉄原の西方4里の所にある小高い丘陵のT字型高地は、敵陣の奥深くに伸びた突出部で、敵に不安と恐怖を抱かせる戦略的要衝だった。

敵が朝鮮の東・西海岸への上陸作戦と並行して地理的に極めて重要なT字型高地で「模範戦闘」を行い、地上前線で攻撃成果を拡大すれば「新攻勢」作戦の突破口を開く可能性があった。

1953年1月24日、金日成主席はT字型高地に対する敵の攻撃企図を見抜き、最高司令部指揮所の執務室で作戦会議を開いた。

会議場に入った主席はまず、作戦地図でT字型高地を指し、敵が「模範戦闘」を通じて狙う陰険な目的と企図を暴いた。

そして、敵の動きから見て攻撃開始時間は明日の朝5時と見込まれるから、われわれには作戦を準備する時間が12時間しかない、今の状況に対処して良い作戦案があれば提起するようにと言った。

幹部たちはみな緊張した表情で顔を見合わせるばかりだった。

当時、T字型高地界線には人民軍の1個歩兵連隊が防御に当たっており、その周辺に100門余りの砲が配備されていた。

それは敵が投入しようとする3個師団の兵力とは比べようもなく少ない兵力だった。

その上、わずか12時間内にそこの防御兵力をさらに増強して敵の企図を粉砕することは決して容易なことではなかった。部屋は重い静寂に包まれた。

しばらくして総参謀部の一幹部が席から立って、敵の冒険的な企図に対処するためには最小限2個の歩兵連隊をさらに増

強するか、さもなければ敵をおびき寄せて両側から攻撃を加えるのがよさそうだという意見を出した。

彼の意見を聞いていた主席は幹部たちに、この地域に砲兵を増強することにより、坑道戦と砲兵戦を組み合わせて敵の攻撃を破綻させる決心である、われわれは砲兵部隊を隠密に機動させ、敵が安心して攻撃する時強力な砲兵火力で敵を制圧しなければならない、頑強な坑道戦と強力な砲兵戦を組み合わせるところに敵のＴ字型高地「模範戦闘」の企図を破綻させるカギがある、と確信に満ちて語った。

会議の参加者たちは自信と勇気が湧いてきた。

当時、Ｔ字型高地には10余の坑道と野戦陣地がよく整えられており、この界線には砲兵武力もある程度準備されていた。

このような条件で砲兵武力をさらに増強するだけでもいかなる大敵をも撃破することができた。

確信に満ちている幹部を見回しながら主席は、Ｔ字型高地界線に機動させる砲兵部隊を自ら指定し、砲兵部隊の迅速な機動はこの作戦の運命を決する基本条件であるとし、地図の上で各砲兵部隊が翌日4時以前に指定地点に到着できるように時間を最大限に短縮しうる行軍コースまで一つ一つ確定した。

綿密な計画と具体的な手配でもって作戦の勝利を確固と裏付けた主席は、行軍の手配と進行過程で政治活動に力を入れ、全ての指揮官と戦闘員が高い革命性と犠牲的精神を発揮して、無条件指定された時間内に展開界線まで到着するようにすべきだと再び強調した。

Ｔ字型高地界線に進出させる砲兵部隊のうちの一部隊はＴ字型高地から88キロの距離にあったので、9時間内には十分指定地点に到着できるが、他の一部隊はＴ字型高地から137キロも離れているうえに、その路上に多くの峠と峰があり、道路の状態もよくないため、急速度で行軍しても展開界線まで到着するには時間が足りなかった。

さらに敵の空中監視を避けながら夜間に機動するのは常識では不可能なことだった。

それについて考えていた主席は、戦闘員たちに今回の作戦の重要性を認識させるなら、十分可能である、抗日遊撃隊員の革命精神を継承したわが人民軍の指揮官と戦士は革命性と任務遂行に対する無条件性の精神が強いので、最高司令部の命令を受ければ、犠牲的精神を発揮してそれを無条件に実行するものと固く信じている、と述べた。

その夜、主席の副官である李乙雪は、砲兵司令部参謀部と

の連係の下に砲兵部隊の行軍状況を把握して30分ごとに主席に報告した。

主席は砲兵たちと強行軍を共にする気持ちで夜を明かし、砲兵部隊の機動を自ら指揮したのだった。

刻一刻と時間は止まることなく流れ、時計の時針と分針はいつの間にか4時10分を指していた。

砲兵部隊が機動を終えて指定された展開界線を占めたという報告を受けた主席は、砲兵の機動で奇跡を創造したとし、全ての砲兵部隊が早く射撃準備を終えて待機し、敵が攻撃を開始すれば砲門を開いて冒険的な「模範戦闘」を恥ずべき惨敗に終わらせることだ、と言った。

1月25日5時、敵はT字型高地に対する攻撃を開始した。80余機の飛行機を出撃させて100余の爆撃と数多くの機銃掃射を浴びせ、数百門の大口径砲で2万発の砲弾を発射してT字型高地を火の海に変えた敵は、正面4キロの前線で40台の戦車を先立たせて攻撃しはじめた。

隠密に機動して待ち伏せていた人民軍砲兵部隊は、敵に向かって一斉に砲門を開いた。

敵の攻撃隊形は瞬時に崩れ、敵陣は火の海と化した。

T字型高地を一気に占拠しようと押し寄せていた新型戦車

や新型砲、装甲輸送車は人民軍の容赦なき砲撃によってせん滅されてしまった。

敵は大勢の死者を出したにもかかわらず、数的優勢を頼んで無謀な攻撃を続けた。

高地では敵が50メートル近くに接近するまで何の気配もなかった。すると敵は、「共産軍はみな火に焼け死んだ」と叫びながら腰も屈めずに高地へ上がってきた。

その瞬間、塹壕からは不意に銃弾や手榴弾が雨あられのように降り注いできた。

堅固な坑道陣地に依拠して敵の爆撃と砲撃にびくともしなかった戦闘員たちは、一斉に坑道から飛び出して敵を至近距離まで接近させて大量にせん滅した。

敵の攻撃は完敗に終わった。

数多くの記者や参観団まで招き、「精鋭」部隊を誇る3個師団の兵力で展開した敵の「模範戦闘」は、人民軍の強力な砲兵火力と坑道に依拠した人民軍戦闘員の集中射撃によって恥ずべき惨敗を喫したのである。

各国のメディアは先を争って米軍の「模範戦闘」は「敗北戦闘」となったと非難し、嘲笑した。

敵の内部は収拾しがたい混乱に陥った。

Ｔ字型高地戦闘を指揮した米第8軍司令官バンフリートは、敗戦将軍という烙印を押されて朝鮮前線から追い出され、米国の支配層内部でもはたして「新攻勢」は可能かという問題をもって言い争った。

金日成主席の賢明な指導の下、輝かしい勝利を収めたＴ字型高地戦闘は米国の「新攻勢」の企図をことごとく粉砕した。

会談での大きな勝利

1951年6月30日、南日総参謀長を呼び寄せた金日成主席は、彼がわが方の首席代表として派遣されることになったと言った。

主席は停戦に関する朝鮮労働党の立場について明らかにし、会談でわれわれの主張を断固と押し通すべきだ、会談の初日から敵を精神的に制圧しなければならないと強調した。

1951年7月6日、停戦会談に派遣される朝鮮人民軍側代表たちを最高司令部に呼んだ主席は、われわれは今まで軍事停戦会談の経験はないが、諸君の会談相手である米国は、他国との会談で自分らの不当な要求を押し付けてそれを実現させた「経験」を多く持っている、それゆえ、諸君は敵との会談でいろいろと複雑な問題に直面し、厳しい闘争を行う覚悟をしなければならない、敵がなぜ先にわが方に停戦会談を提起してきたのか、その真の目的がどこにあるのかをよく見抜かなければならない、と指摘した。

1951年7月10日10時、停戦会談が始まった。会談のテーブルに向かい合って、誰が誰をという厳しい政治的対決、銃声なき前線での対決が始まったのである。

昔から大事な客を迎えるという意味で呼ばれてきた景色の

いい開城の来逢荘では、朝鮮を侵略した全く歓迎できない招かれざる客との会談が行われた。

南日朝鮮人民軍総参謀長を首席代表とする朝鮮側の代表と米極東軍海軍司令官のターナー・ジョイ中将を首席代表とする米国側の代表が会談のテーブルについた。

朝鮮側の代表は南に面した北側の椅子に、米国の側は北に面した南側の椅子に着いた。

会談のテーブルに座る瞬間、米国側首席代表のジョイは眉をひそめた。戦勝国が南に面した位置を占め、敗戦国が北に面した位置を占めるという東洋風習通りに席が決められているからだった。

米国側は会談場に来る時にも朝鮮人民軍の鹵獲した米軍ジープと3台のトラックに乗ってきたが、その車には予備会談の合意通りに白旗が立てられてあった。

まず、朝鮮側の南日首席代表の最初の発言が場内に力強く響いた。

彼は、双方が全ての敵対的軍事行動を中止し、38度線を軍事境界線に確定すると共に、戦争を中止し朝鮮問題を平和的に解決するため、早急に全ての外国軍隊を撤退させる内容が当然取り扱わなければならない、と主張した。

しかし米国側は、傲慢無礼にも停戦会談の開催中にも「敵対行動が続くだろう」と公言しながら自分らの「威勢」を示そうとし、会談では「軍事的問題だけを討議すべきだ」という破廉恥な主張を繰り返しながらトルーマン大統領の最終承認を受けたという議題草案なるものを提出した。

9項目からなる米国の議題草案は、米軍撤退のような重要な問題が上程されないように先手を打ち、停戦が実現した場合にも南朝鮮を引き続き占領し、共和国北半部を侵略するための戦争政策を引き続き追求しようとする下心をそのままさらけ出したものだった。

敵の企図を見抜いた金日成主席は、午前会議の休憩時間に南日に電話をかけ、成文化した議題草案を提出するよう指示した。

その議題は第1に、会談の議題を通過させる問題、第2に、38度線を双方の軍事境界線にして非武装地帯を設定する問題、第3に、朝鮮から全ての外国軍隊を撤退させる問題、第4に、朝鮮での平和と停戦を実施する措置問題、第5に、停戦後戦争捕虜の処理問題などだった。

この日の午後、朝鮮側が成文化した議題草案を提出すると、米国側は朝鮮側の正しくて明白かつ合理的な議題草案に唖然とし、唐突に捕虜送還問題から先に討議しようと無理強いをした。

そして、他の条項はみな受け入れるが、軍事境界線の設定問題と外国軍隊の撤退問題は政治問題だから再度会って討議しようという言葉を残して退場してしまった。

議題草案を先に提出することで主導権を握ろうとした米国の企図はことごとく破綻した。

初日の会談についての報告を受けた金日成主席は、守勢に立たされた敵に活路を求める機会を与えずに、敵の議題草案における最も弱い点に強力な打撃を加えて白紙に戻すようにした。

これを受けてわが方の首席代表は、翌日の会談で敵が提出した会談議題の第2と第3の項目の不当性を論証し、鋭い攻撃を加えた。

慌てふためいたトルーマンは米統合参謀本部に、朝鮮側の方案に対抗する措置を早く提出せよという指令を下達したが、米統合参謀本部のシンクタンクはなんの妙案も出せなかった。

議題の討議から自分らの奸計が見抜かれると、米国は会談を破綻させる目的で「記者団作戦」なるものをつくり上げたが、それが失敗に終わると、3日間も会談を休会させた。

しかし7月16日、再び会談場に現れた敵は、自分たちが提出した第2、第3の項目を放棄せざるをえなくなった。17日には朝鮮側の提出した5項目の議題のうち、外国軍隊の撤退を除く

全ての項目が議題として採択された。

これは、金日成主席が南日に、米国が議題の討議で後ずさりすれば連続的な強い攻撃戦を展開して敵をさらに守勢に追い込まなければならないと強調し、敵と互いに対立している項目を一緒に討議せず、軍事境界線の設定問題と停戦監督の問題を先に解決し、外国軍隊の撤退問題は後で別途に討議することについて具体的に教えた結果だった。

その後、朝鮮側は会談の議題討議で成し遂げた成果に基づいて、「朝鮮から全ての外国軍を撤退させる問題」を議題に含めることに最終攻撃の矛先を集中した。

南日の怒声が会談場に響き渡った。

「朝鮮戦争はあなたたちが朝鮮の内政に干渉し、侵略軍を派遣したために起きた戦争だ。だから、停戦を実現して確固と保障し、朝鮮問題を平和的に解決するためには、必ず朝鮮から全ての外国軍を撤退させなければならない。

なのに、なぜあなたたちは外国軍の撤退を必死になって反対するのか。戦争は遊覧ではない。兵士は遊覧客ではない。米軍を駐屯させるのは朝鮮の風致を遊覧させるためなのか。

世界の平和愛好人民は、朝鮮から全ての外国軍を撤退させることを一致して要求している。停戦の目的が息つく暇を得

て戦争を再び引き起こすためではないなら、なぜあなたたちは朝鮮から引き上げようとしないのか」

あらゆる術策をつくして外国軍隊の撤退問題の討議を阻もうと狡猾に策動していた敵は、朝鮮側の強硬かつ原則的な要求に抜け道がなくなると、7月24日、マーシャル国務長官を記者会見に立たせて、米国は朝鮮で停戦が実現すれば、「最高レベルの政府官吏会議を開いて撤兵問題を討議」するつもりだと長々と弁解し、7月26日には朝鮮側が提起した外国軍隊の撤退問題を戦後、政府レベル政治会議で討議するという議題第5項の採択に同意した。

会談の議題を討議する17日間の対決で朝鮮側は、わが方の要求が反映された5項目を本会談の議題として採択させることによって最初の会談から勝利を収めた。

議題の討議過程でさんざんな目にあったジョイは記者に、「停戦会談が始まってから最初の2週間に私の体重は4.5キロも減ってしまった」と告白した。

しかし、米国はその後の会談でも自分らの強盗さながらの野望を実現させようと必死になり、そのつど朝鮮側の激しい攻撃にたじたじとなった。

7月27日、午前の会談が始まった時である。

朝鮮側の首席代表が会談議題の第2項目である軍事境界線の確定問題に関する朝鮮側の提案について発言している時、敵側の首席代表は朝鮮の提案を聞こうともせず、変な標識が記されている地図に視線を向けていたが、ふとそれを差し出しながら「補償線」という詭弁を言い立てた。

敵側の途轍もない主張に朝鮮側の代表らは驚愕した。

その地図には「軍事境界線」は黒色で、「非武装地帯」の南側の線は青色で、北側の線は赤色でそれぞれ記されていたが、その「非武装地帯」なるものは38度線から朝鮮側地域へ80キロも入っていた。

敵は恥知らずにも、当時人民軍が38度線以南で占めていた地域である開城と南延白地区、甕津の一部はもちろん、38度線以北の甕津郡松月洞から錦川―高城に至るまでの合計1万3000余平方キロ、すなわち全朝鮮面積のほぼ20分の1に相当する広い地域を明け渡して撤退せよという魂胆だった。

一枚の地図と一言の言葉で血潮を流して獲得した朝鮮側の広い地域を手に入れようと画策する米国側の地図を一見した南日首席代表は、赤色、青色、黒色の鉛筆さえあれば誰もが引ける線を描いた奇怪な地図もあるものだ、と大笑いした。

すると、ジョイはむしろ驚いたふりをし、笑止千万にも自

分らの海軍、空軍が「優勢」だから、「制空権」「制海権」の「補償」として朝鮮側が一定の領土を明け渡さなければならないと主張しはじめた。

会談の相手側が疑問を抱いても、驚いても、聞いているかどうかにもかかわらず、ジョイはなんらかの呪文を唱えるようにくどくどと言い立てた。

「国連軍は朝鮮半島の制空権と制海権を完全に掌握しています。停戦によって利益を得るのが誰ですか？海岸を封鎖し、鴨緑江まで任意の地点を爆撃できるのは国連軍ですか、それとも北朝鮮軍ですか」

自分らの海軍と空軍が相手より強いから、その代価として領土をただで明け渡すべきだという詭弁は、戦争史上どの会談にも見られない破廉恥な強盗さながらの論理だった。

朝鮮側の首席代表は、7月28日の会談で米国の「海・空軍の優勢論」を打破することに重点を置き、敵の不当な主張を粉砕するための攻撃戦を展開した。

南日は敵の主張する詭弁の不当性を理路整然たる論理で反駁しはじめた。

「戦争で決定的な役割を果たすのは陸軍であり、海軍と空軍は決して単独で戦闘勝利を達成することができない。これ

は近代戦争の歴史がよく示している。あなたたちが『制空権』や『制海権』の『補償』を要求しながら地上前線を少しでも上へ押し上げようとしている自体が、すでにあなたたちの詭弁の不当性を自ら暴露している。

地上前線は地上兵力だけでなく、空中と海上の兵力の総合的な力によって維持され、発展する。

あなたたちの場合、陸・海・空軍が総動員して、やっとのことと今の前線を危うく維持しているのが事実でないというのか」

朝鮮側の理路整然とした、激しい攻撃にジョイは何の抗弁もできなかった。

守勢に陥って途方に暮れていたジョイはやっと正気を取り戻し、海軍と空軍の作戦を強めて自分らの要求した地域を軍事的攻勢によって占領すると「威嚇」した。

虚勢を張るジョイを睨んでいた南日は、やるならやってみよう、われわれはいささかも恐れていない、と面詰した。

会談場で敵を守勢に追い込んでいた時、金日成主席は朝鮮の宣言が決して空言でないことをはっきり示すために空と海で敵により強力な打撃を加えるよう命令した。

人民軍戦闘員は積極的な戦闘行動を行って敵に手痛い打撃を与えた。

停戦会談第20回会議でも会談を破綻させる口実を設けようと狂奔していた米国は窮地に陥り、朝鮮側の力強い意志と打撃に膝を屈するほかなかった。

このとき、米国側は軍事境界線の確定に関する朝鮮側の主張に考慮することがなく、さらに言うべきこともないとし、一切口を開かないことで挑発をかけた。敵の沈黙行動は実に変態的妄動だった。

朝鮮側の代表らもあきれて敵の「沈黙」に沈黙でもって2時間以上も対決した。無言で互いに睨みつけながら対座するということは文字通り意志の対決だった。

当時の状況についてある外国図書にはこう書いてある。

「ジョイは巻きタバコを手にしたまま、戦い好きの雄鶏のように首を伸ばし南日を睨みつけた。

南日はパイプをくわえて相手の顔を直視しながら少しも譲らなかった。無言の緊張の中で時間が流れた。忍耐力を競う熾烈な戦いだった。南日は平然とパイプにタバコを取り替え、おいしそうに吸い始めた。

世界の外交史に見られないこの『唖会談』でついにジョイが負けてしまった」

ジョイがそれ以上耐え切れず、気の抜けた声で休会を先に

提案した。「唖会談」でも敗北したのである。

ロイター通信も後日、米国のこのような行動を指して、「海・空軍の優勢をもって地上で補償を受けるというのは前例のないことだ」とし、米国を糾弾した。

1951年9月中旬、朝鮮側の首席代表が乗用車「グライドラ」に乗って現れると、会談場は騒然となった。

その乗用車は、ソウルが陥落するまで南朝鮮駐在米大使のムチョーが利用していた高級乗用車だったからである。

それを眺める米国側の代表らは恥ずかしくて顔を上げられず、記者たちは特ダネのニュースを見逃すまいとカメラのシャッターを押し続けた。

米国は1951年11月17日、長引いていた双方軍事接触線を軍事境界線にするという朝鮮側の提議を受け入れた後も、「敵対行動は停戦協定が調印されるまで続くという諒解を再確認する」という条件をつけ加えようと主張した。

米国の意図は、停戦会談で達成できなかった目的を軍事行動で達成しようということだった。

「わが方の提案には、軍事境界線の確定以降から停戦協定の締結に至るまでの会談期間に、あなたたちの軍事行動を拘束することを予見したいかなる条項もない。勝手にしろ。し

かし、あなたたちが自分の力を過信し、いかなる『軍事的圧力』によってすでに確定した軍事境界線を変更させようとするならば、その結果はあなたたちが望む通りにはならないだろう。だからこそ、われわれはあなたたちの今後の軍事行動を敢えて制限しようとせず、停戦協定を調印する際、双方の軍事桉触線をその変化に応じて修正できるというわれわれの主張を重ねて強調するのだ」

朝鮮側首席代表のこのような強硬な答えに米国側は気勢をそがれ、再び後ずさりせざるをえなくなった。

その後の戦争過程は、朝鮮側の首席代表の発言が決して空言ではなかったことを実証した。

結局、米国は戦争でも会談でも朝鮮人民に膝を屈せざるをえなくなった。

朝鮮人民は戦争にも停戦にも対処できる準備が出来ていたのである。

百戦百勝の鋼鉄の総帥である金日成主席の指導は、朝鮮人民の全ての勝利の源泉だった。

朝鮮停戦会談の米国側首席代表だったジョイは後日、朝鮮停戦会談に関する回想録で、「過去を振り返ると、他の全ての問題に関する合意に達する前に停戦線(軍事境界線)の討議

に同意したことはわれわれの大きな失策だった」と慨嘆し、軍事境界線の設定問題の討議で惨敗して朝鮮停戦会談の運命はその時すでに決まったも同然だとし、これは「会談での転換点だった」と告白した。

米陸軍の重要部署である軍事歴史部もそれを認めてこう評価した。

「彼ら(朝鮮側)は結局、戦争が終わる最後の日まで続いた軍事境界線の設定で勝利した」

1953年7月27日、朝鮮中央通信社は「板門店の停戦協定調印式場で7月27日、高星順特派員発朝鮮中央通信」という記事を報じた。

「朝鮮での停戦は実現した。

地球上のどこでどんな仕事に従事する人であれ、善良な良心を持った人々の視線はみな今日、朝鮮の板門店へ集中した。

それは、板門店で24カ月17日間行われてきた停戦会談に終止符を打つ停戦協定調印式があるからである。

朝中両国人民と全世界の平和愛好人民は、平和への新しい段階になる朝鮮停戦協定の達成を熱烈に歓迎している。

苛烈を極めた祖国解放戦争の3年間と停戦会談の2年間は、実に世界史的な意義を持つ時期だった。祖国解放戦争の3年

間は朝鮮人民があらゆる難関を乗り越え、無比の勇敢さと英雄主義を発揮した3年間であり、輝かしい勝利に満ちた3年間だった……」

その日の22時、155マイルに達する全前線の双方の前哨基地では一斉に銃声が止んだ。

最も厳しかった戦争はついに幕を下ろしたのである。

侵略者の米国は敗北した。

そうして、一躍世界の耳目が集中した板門店での停戦協定調印式は、米国の侵略者との戦争で英雄朝鮮の勝利を全世界に轟かせた誇るべき快挙として歴史に末永く伝えられるようになった。

その日の21時、平壌の夜空には124門の砲から戦勝の花火が打ち上げられた。

停戦協定の調印式

祖国解放戦争における総合戦果

敵兵の殺傷及び捕虜
156万7128人

米軍: 40万5498人
南朝鮮かいらい軍: 113万965人
追随国軍: 3万665人

戦闘技術機材

航空機: 鹵獲 11機、撃墜 5729機、撃破 6484機
戦 車: 鹵獲 374台、撃破 2690台
装甲車: 鹵獲 146台、撃破 45台
自動車: 鹵獲 9239台、撃破 4111台
艦船及び船舶: 鹵獲、撃沈、撃破 564隻、
各種の砲: 鹵獲 6321門、撃破 1374門
各種の狙撃兵器: 鹵獲 92万5152挺
各種の通信機材: 鹵獲 5788台
火炎放射機: 鹵獲 117挺
各種の砲弾: 鹵獲 48万9000余発
各種の弾丸: 鹵獲 2124万5000余発
各種の手榴弾: 鹵獲 22万4000余発
各種の地雷: 鹵獲 1万4400余個
各種の起重機: 破壊 5台

むすび

朝鮮で戦争の砲声が止んでからいつしか70年の歳月が流れた。

苛烈な戦闘が繰り広げられた高地も今や樹木が生い茂って当時を振り返る痕跡が見当たらず、体験者もさほど残っていない。

しかし、1950年代には10代、20代の青春の身であった参戦老兵の頭に霜が降りて久しく、砲煙にくすんだ軍服の色は褪せたが、彼らによって、金日成主席がいさえすれば必ず勝利するという闘争精神と貴い伝統、祖国防衛精神がもたらされたのは戦勝に劣らない意義深い出来事であり、その精神的財産は今もいささかの変色も知らず朝鮮人民の前進に無限の活力を与えている。

偉大な戦勝史

執　筆：金秀蓮
編　集：尹英日、張香玉
翻　訳：李鮮日、金光哲
発行所：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日：チュチェ112(2023)年7月

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp